

ありがとうオルガマ
リー姉様

小指技師

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

考え付いた小話を書いてしまったので短編として上げちゃおうを合言葉に投稿しました。

オルガマリーに不遇な弟が居てオルガマリー所長がお姉ちゃんするだけのお話。作者が絡ませたいキャラと好きなだけ好きなように絡ませるだけです。

目次

彼は幸せを噛み締める	1
彼は今日を謳歌する	15
彼は笑えないが笑顔が好き	27
彼は今日も学ぶ	41
彼は手放さない	55
彼は進む、だが道は無く…	69
彼は手を掴む	83
彼は動き出す	96
彼は入念な準備をする	108

彼は幸せを噛み締める

オルガマリー・アニムスファイアがソレに初めて会ったのはまだソレが幼く、特異性もそれほど目立たなかった時期だ。

だが飽く迄もそれほど目立たなかっただけ、故に確かにそれは異端で、常識外で、違和感の塊である。

瞳は鮮やかな紅だが光を吸収しているのか何も映さず、幼子にしては泣きもせず大人しく一点を見つめる姿が殆どだった。しかし、観ているのは感じられる。観察しているのが嫌という程伝わったくる。端的に言えば不気味な幼子。

だがオルガマリーはそんな幼子を――



円形の水槽に少年は居た。目はバイザーで覆われ、口には呼吸器が今も酸素を供給しているのが水泡から見て取れる。身体は生まれたままの姿で晒され痩せ気味なのが分かるだろう。表情は窺えないがバイタルは正常を示している事から身体的にそして精

神的にも健全。

それもそうだろう、少年は日常的に水槽に放られては長時間に渡って揺蕩うのだから。今更この状態に対して思う事もそうはない。

しかし見るものは華奢な少年の姿を見て心を痛める事だろう。斯く言うオルガマリーもその一人であるのだが。

「おはよう今日も調子は良さそうね。どうかしら、違和感とかはない？」

オルガマリーはキツく締め付けられる心臓に耐えながら自身の弟に声を掛ける。そして是を首肯で返す少年を見て安堵する。本人達からしたらよくあるやり取りだ。

「今日はもう終わりにしましょう。魔力はもう大丈夫だから」

爛々と光る魔力タンクを横目に操作を行い少年を解放する。水槽内の液体を排水し拘束具も外されていき、浮いていた身体も重力に従い緩やかな脱力と共に水槽の底に帰ってきた。

「シャワーを浴びて来なさい…ちゃんと待っててあげるから」

声も無く首を上下するだけの返答を行った後、バスタオルに身を包んだ少年は長い白髪を纏めてからシャワールームへと歩いて行った。それを見送るオルガマリーは自分の手を強く握り締めた。

「結局、結局何も変わらないじゃない……」

それは誰に向けた言葉でもない。ただの愚痴、自らの不甲斐ない無さに対する叱責だ。

「カルデアの所長に成つてもあの子を自由に出来なかつた。それどころか負担が増える始末。肩書きは肩書きでしかないのね」

オルガマリイは父であるマリスビリーの急死を経てアニムスフィア家の家督を継ぎ、人理継続保障機関フィニス・カルデアの所長の座に着いた。

父を尊敬していたオルガマリイは悲観を許さない事後処理に涙を流すことすら忘れたが、それと同時に舞い降りたチャンスに密かに心を踊らせた。

弟を解放することが出来る。

少年は生まれた頃より膨大な魔力とアニムスフィア家に恥じぬ魔術回路を保有していた。通常ならばアニムスフィア家の当主になってしかるべき存在だ。

しかしそうはならなかつた。マリスビリーには時間が無かつた。余裕が無かつた。更に少年の持つ膨大な魔力の良質さは非常に間が良かった。少ない魔力で多くの結果を生み出す少年という人材はカルデアにとって好都合過ぎた。

「ごめん、情けない姉で……ごめんねノエル」

マリスビリーは少年に名前を付けなかつた。単に不要だと思つたのか、子として認識する事に躊躇いがあつたのか今では知る手段はない。そんな名無しの少年にノエルと

言う名前を付けたのはオルガマリーだ。

壁に背を預け、溜め息を吐いている内に少年改めノエルが乾き切っていない長髪を揺らしながら帰って来ていた。オルガマリーはそんな弟の姿を見て憂鬱な心が洗われるのを感じ自然と笑みが零れる。

「髪はキチンと乾かさないと、傷めてボロボロになるでしょ？」

髪の水気を飛ばし、手櫛で整えてやる。ノエルは表情の変化に乏しいのに加えてバイザーを装着している為どうにも感情を把握しにくいのが、オルガマリーは喜んで感じ取った。そしてその事実が嬉しくてたまらない。

「ほら出来たわ。どうしたの？」

「姉様、同じ髪がいい」

「え？」

指を自分とオルガマリー交互に指していき、ノエルはたどたどしい言葉でそう伝えてきた。

「ペペ、長い髪もつたいたい、言った。ロマニ、姉様同じが良い、言った」

「後でケーキを差し入れてあげようかしら…」

「姉様、いや？」

「そ、そんなわけないでしょう。じゃあ私の部屋に行きましようか、ここじゃ何も無いか

ら

何処へ移動するにも二人一緒の時は手を繋ぐのが通例、よって今回も自然とオルガマリーは弟の手を引いた。ノエルの年齢を考えれば恐ろしく小さく華奢で頼りない手は活力を与えてくれていている気がするのだとオルガマリーは誰にも言わないが思うのだった。

☆☆☆

部屋に入り少々味気なさ感じる内装に目を逸らしながらプラスチックの箱に入ったへアゴムを摘む。鏡の前にチョコンと座っているノエルの髪を纏めあげて優しく傷付けないように編み込む。

鏡越しのノエルは三つ編みの編み込まれていく自分の髪を興味深げに見詰めていた。バイザーが取り払われ露わになった深紅の瞳は忙しない瞼の運動に見え隠れしている。

「後で教えてあげようか？」

「ううん、姉様、して欲しい」

「フフ、そう言うと思ったわ」

人並み、人としての並の生活はオルガマリーが弟に一番あげたかったものだ。前所長

の代では酷使されるノエルの姿を見て身が張り裂ける思いをしたと苦虫を噛み潰したように顔を歪める。

「姉様、悲しい？」

「いいえ悲しくなんてないわ。貴方の姉様は強いんだから！」

「ん、そういう事にしとく」

「あら生意気な口叩く様になったわね。誰の入れ知恵？」

ノエルは手を顎に添えて少し考え込んだ。

「ダ・ヴィンチ、言うな、言った」

「そう、ならしやうがないわね」

オルガマリーは今日の予定にダ・ヴィンチの工房へ寄る予定を追加した。あの天才は碌な事をしないと今日の怒りゲージにカウントが入る。

「ほら出来たわよ。あ、そういうえば朝食はまだよね？ 食堂に行きましようか」

「ナポリピッツア、ハンバーガー、ホットドック」

「無難なベーコンエッグとトーストにしなさい。もちろんサラダも食べること！ 誰よ

ジャンクフードなんて食べさせた職員！」

怒りゲージにカウントが入る。

ノエルのいない場所であればいつヒステリックモードに入るか分からなくなった。

食堂はそれなりの職員が食事を摂っていた。夜通し作業をしていたのか隈が出来ている者や朝が弱いのか髪の本ネが酷い者まで実にバラエティに富んだ食堂だ。

「おはようございませう所長。ノエル今日はお姉ちゃんとお揃いなんだな」

「ええおはよう。モーニングのAセットをお願い」

「Aですぞ了解。ノエルは？」

「ナポリピッツア、ハンバー」「私と同じものを」姉様、酷い……

食堂の職員は苦笑しながら応答し裏へと伝えに行つた。オルガマリーは強行突破を図ろうとした下手人に非難の視線を浴びせた。下手人は不貞腐れたように床を蹴っている。

「反省なさい。いいわね？」

洩々と言つた様子で頷く弟に溜め息を零すも口元は綻ぶばかりで迫力はあまりなかった。

「はいお待ちどうさま。Aを二つに、ノエルにはサービスでプディングをやろう」

「ありがと」

いい笑顔でサムズアップでしてくる食堂職員にこれまたサムズアップで返すノエル。オルガマリーはほっこりしたので怒りゲージが減少した。

無難に端の席に向かい合う形で座り食事を摂り始める。するとしばらくも経たない

内に相席者が現れる。

「おはよう二人とも、相席いいかな？」

「おはようレフ。隣にどうぞ」

いつも微笑みを絶やさない超一流技師のレフ・ライノール。オルガマリーとも深い親交を持ち、ノエルの事もどのような存在か認識している数少ない一人。ノエルは困った時にレフの名前を呼ぶ姉の姿をしばしば目撃した事がある。

「レフ、相変わらず、もじゃもじゃ」

「そういう君はオルガと同じ髪型だね。結ってもらったのかな？」

自分の髪に注視された事で機嫌が良くなったのか前髪を弄り出すノエル。オルガマリーの怒りゲージが減少した。

「そう、似合う？」

「もちろんだよ。こうして見るとやはり姉弟だ、幼少期のオルガを思い出す」

「ちよ、止めてよレフ小さい頃の話なんて！ 私の姉としての威厳が揺らぐでしょ！」

ノエルの前では出来る限り頼れる姉として在りたいと思っているオルガマリーからしたらレフの口から出るだろう幼少の話は地雷であるのは確実。あんな事やそんな事を語られてしまったては築いてきた頼れる姉オルガマリーのキャラクターが木っ端微塵となるだろう。

周りが引く程の必死さを見せる若き所長の姿に笑みをさらに深めたレフは必殺の言葉を繰り出す。

「ノエルは聞きたそうだが？」

一抹の希望を掛けて愛する弟の姿を見るも――

(すごい見てる…)

バイザー越しでも自分の瞳を真つ直ぐ見てきていると分かるだろう。動かない視線に反して忙しく動く手も相俟っていらしい。間違はなく何かを強請る子供。

「グヌウ、ノエルの為なら過去の話くらい…」

「賢い選択だ。では何から話そうか――」

ノエルは流動食の味気ない栄養補給よりも食堂の温かい食事の方が好きになった。自分の心音と呼吸器の駆動音に耳を傾けるよりも大好きな姉の話聞く方が好きになった。

きつと、もつと多くのモノを好きになる。それはたぶんとても楽しい。

☆★☆☆

朝食を終えればノエルには若干の自由時間が存在する。だが姉には仕事があり、つい

て行くと邪魔になる可能性がある」と何となく分かっている。故に行く場所は大体――

「ロマニ、やつぱりここ居る」

「今のところここを使う人は決まってるからね。サボるにはもってこいなんだ」

「姉様、怒る」

ロマニ・アーキマンは人懐っこい笑みでそうだろうねと同意した。彼の脳内では小言と皮肉と罵声を一齐に浴びせ掛かるオルガマリーの姿がありありと浮かんで居る。

「姉様、困らず、ダメ」

「だって彼女、ボクが居るだけで場が緩むっていうんだよ？　ボクが起こす問題行為なんてサボりくらいだし、そのサボりだってマリーの機嫌を損ねないためなんだ」

「ケーキ、いる？」

「サボりの必需品さ」

あれやこれやで少年を丸め込もうとする汚い大人がいるらしい。

「姉様、報告」

「ケーキがもう一個あるんだけど…」

「ケーキ、罪なし」

少年に賄賂で口止めする汚い大人がいるらしい。

「さてボクのサボりは置いておくとして、どうやらマリーに髪を結ってもらえたみたい

だね」

「似合ってる？」

「もちろんだよ。マリーと初めて会った時を思い出すなあ」

「レフ、同じ様なこと、言ってた」

「レフがかい？」

ノエルはレフから聞いたオルガマリーの面白エピソードをロマニに詳らかに話してしまった。中にはロマニに知らなかった物もあり興味を引いたが彼女本人が聞いた事実を知ればガンドで頭部を吹っ飛ばされる。フィンの一撃は伊達じゃない。

「そろそろ、行く」

「次はレオナルドの所かな？」

ノエルは無言の首肯で返答し扉を開く。そして部屋を出る直前で振り返る。

「つぎ、ロマニの髪、真似る」

ロマニに呆気にとられたと言われた言葉を反芻するとフツと笑みが零れた。優しく愛おしむ時の顔だ。

「そっか、楽しみにしているよ」

無言の首肯で答えた後、弾む足の赴くままにダ・ヴィンチの工房へと向かうのだった。道中通り掛かった職員に貰ったお菓子群を両の手に抱えながら。

☆☆☆

天才レオナルド・ダ・ヴィンチの工房には不思議な物品が沢山ある。片手間に作ったガチ礼装やガチで作ったギャグ礼装。今日も彼（女）はヘソクリのリソースを使って新たな試作品を量産していくのだ。

ふと私は掛けられた時計を見て微笑んだ。そろそろ他称ダ・ヴィンチの助手がやって来る頃合だからだ。であれば天才の天才による天才の為の美味しいココアを用意してあげよう。

幾つか彼の為の礼装を拵えた事があった。思えば付き合いはその頃からだろうか、所長からのオーダーでそれなりの物を作れば良いだろうと考えていたのを覚えている。

正直使用者を伏せられていたので細かい調整も何も無い試作ではあったが、サーヴァントの様な規格外な存在じゃなければ十分に効果を発揮するくらいには性能が高かった筈だ。

だが一週間も経たないうちに背後にオーガかデーモンを顕現させたえらくご立腹な所長が内側から弾け飛んだ礼装を持ってやって来た。宥めた後で事情を聞けば使用者が魔力を通した途端弾け飛んだと聞く。

仮にもこの私が作った礼装を一瞬でお陀仏にした魔術師が居る事実には昨今忘れて久しい興奮を覚えた。間違ひなく特異な存在である使用者。これは直接会って専用に行ななければどうにもならないと無理難題を説得して根掘り葉掘り聞いてみた。

『私の弟よ……誕生日だったから……なのに、はあ……』

オルガマリ―所長の弟と言えばカルデアの動力源の一つだと言うあの弟くんなのでろうと気付いた。奇妙な存在だと気になってはいたんだ。

「今では定期的に来てくれるし、ヘソクリをちよろまかす事も減って大助かりなんだよねえ」

「ダ・ヴィンチ、独り言、怖い」

「おやノエルったらレディの部屋に入る時はノックしなきゃダメなんだぜ」

おかしい首を傾げられてしまった。私は何処からどう見ても黄金比率を叩き出す美女だろうに。いいかねノエル、可愛いは作れるんだ。

「ダ・ヴィンチ、そのまま、可愛い」

「君の正直なところホント好き」

こうして毎日の様に来るようになったノエルにいる知識いらぬ知識を授けるのが私の息抜きになった。オルガマリ―所長には内緒だよ。

—あとやっぱり美少年は最高じゃな—

☆☆☆

今日も今日とてノエルは新鮮で自由で素晴らしい日を過ごせた。毎日が新しく煌めいていて幸福なのだ。前所長の時では味わえない日常だった。だからノエルは水槽に戻る時によく思う。

—どうか夢ならば覚めないでください。

彼は今日を謳歌する

ノエルの目覚めは水音と呼吸音から始まる。彼が布団で目覚めたのは今では古い記憶で臆気になってしまった。姉が添い寝を申し出て来た事もあったが、カルデアに魔力を行き渡らせる業務と天秤に掛ければ提案を取り消さざるを得ないのだ。

確かにオルガマリーはノエルの姉でありカルデアの所長と言う地位に着いている。ノエルもオルガマリーの弟と言う関係は事実だ。しかしノエルはカルデア職員と言う枠組みでは無い。

ノエルはカルデア付属の能動的な動力源、言ってしまうえば道具でしかない。よってオルガマリーが弟を思い、暖かい布団と一緒に寝ようとそれは所長と言う地位を使って動力源を私的に利用したと言われても何も言えない。

魔術師とは利己主義だ。そこに道徳など望めない。いたいけな少年を道具だと割り切れる。それが普通の魔術師。寧ろノエルはホルマリン漬けにされていないだけマシな扱いだであるのだ。

だから今のように水槽の中の覚醒はノエルにとって日常の一場面でしかない。

「おはようノエル。バイタルは正常を示してるけど、調子はどうかしら？」

姉とのこのやり取りもまた、ノエルにとって日常的になった一場面だ。

☆☆☆

マシユ・キリエライトは定期的に検診をしなければならぬ。

無菌室から出てからはスパンが輪をかけて短くなつたかもしれない。だが彼女自身いざと言う時に身体の言うことが効かなくなる事を鑑みて許容せざるを得ないのは認識している。

いや正直そんな事はどうでも良かったのかもしれない。彼女からしたら早くシャーロック・ホームズの活躍を活字を通して眺めたかったし、写真を見て外の世界に思いを馳せたかったのは事実なのだから。

しかしマシユは定期検診に対して、聊か認識を改める出来事があつた。彼女は友人が出来た。対等で、互いを認め合う様なベストフレンド。

「ドクター、今日も彼は一緒なんですか？」

「うん、待ち時間や移動時間中には会えると思うよ」

ロマニの応答に口角が上がるのが分かつた。そういえば初めて出会つた時はどうであつただろうか…

彼の話はロマニを通して予め聞いていた。

曰く、オルガマリー所長の弟。

曰く、ダ・ヴィンチ女史の助手。

曰く、所長抑制装置。

曰く、華奢な見た目に反して大食漢。

正直なところロマニの教えてくれたキーワードでは人物像が微塵も湧かないと苦情を呈したが、どうにも実際に会わないことにはどうやっても彼という存在は想像も出来ないだろうなとヘラリと笑って返されるだけだった。

当時のマシユはその返しに首を傾げつつ会ったことの無い人物の像を探すことしか出来なかった。そして間もなく会ってしまう事になる。長椅子の上で転寝する彼に。

目の前で気持ち良さそうに船を漕ぐ少年が件の彼と一致しなかったマシユは顎に手を添えて首を傾げる事により微妙な空間を生んだ。

ともあれ心地よく眠る少年を起こすのは忍びない、黙って横で呼ばれるまで座る事にした。

「んっ」

時折何処か艶かしい声を出す顔立ちが良い美少年。

(これは……心拍数が上昇しています!?)

かのレオナルド・ダ・ヴィンチは言った美少年は最高じゃなど、もしかしたらこの時のマシユには通づる物が――

(丁度検査日で助かりましたね)

——という事は勿論ない。

そういうのはダ・ヴィンチだけで十分。自重が出来ている間はオルガマリーも手は出せない。美少年至上主義過激派は潰えることはないだろう。

「ふみゆ……」

二の腕辺りに掛かる圧力。温かく、何より軽かった。ふわりと香る甘い香りはシャンブーだろうかそれとも柔軟剤？ いや香水かもしれない。

身体を動かせば少年があらぬ方向に流れるかもしれないと考えたマシユは首だけで覗き見た。

(また、心拍数が……)

少年は見事にマシユに寄りかかっていた。息遣いはより近く感じられる。バイザーで見えなかつた睫毛の長さや頬の上気の具合が鮮明に見て取れてしまう。

マシユが不思議な感覚に捕われている間に圧力は膝へと移った。肉付きの良い膝で少年の頭が軽くバウンドし綺麗に納まった。彼が身動きすると擦りたい。

(これは、どうするのが正解なのでしょう？)

マシユからしたら全てが初めてで新鮮な事ばかりだ。だが今回の膝枕事件は余りに予想外、けれど定番な流れではある。ならば此処は撫でるのが模範解答なのだろうとマシユは茹だる頭で考えた。

(髪は指の通りが良くてサラサラですね。頬っぺも柔らかい)

思わず心の中で実況をしてしまう程に夢中になる撫で心地。マシユ・キリエライトは今まで感じたことのない感動を覚えた。

「…何か、気持ちいい?」

「あ…」

ノエルは微睡みと側頭部に感じる心地良さと共に目覚めた。装着していたバイザーがズレているのか左右で見え方が違う。臆気な思考で寝返りを打ってみればどうやら誰かの膝の上らしい事に気付いた。

そして目が合ってしまった。

マシユは深い紅を見た。採血をした時に見た事のある血の色を想起させる紅。脳に直接刻まれる色の記憶に不思議と不快感は無く、ただマシユはその瞳に―言葉に出来ない共感を覚えた。

「誰?」

「マシユ・キリエライトです。そちらのお名前を聞いてもいいですか?」

「ノエル。ただの、ノエル」

これが彼—ノエルとの最初の繋がり。フアースト・コンタクト

どうやらかなりの時間を彼との記憶探しに費やしていたようだ。マシユは時計を見て思った。

そろそろノエル本人が来るだろう。どのような話をしようか。お互い外をよく知らないのもあつて森の匂い、磯の香り、草原の風、快晴の青空に澄んだ空気の味。ノエルとマシユの世界の考察は時間を幾ら消費しようと終わることがない。

「マシユ、おはよう」

「おはようございます、ノエル」

マシユは友人を持った。

気兼ねのない話に共感し、同調し、共鳴出来る友人を。

☆☆☆

シミュレーションルームは様々な状況を想定して膨大なステージとエネミーの緻密なデータを元にマスター候補達が演習する場所である。

そこにノエルは居た。ダ・ヴィンチ印の魔術礼装をその身に纏って魔力を滾らせてい

る。

「それで前回の礼装と何が違うのかしら。次あれが弾け飛ぶ様ならその無駄に整った顔に拳の型が出来るんだけど？」

「いやいやあの時はノエルが使うとは露とも知らなかったんだからしょうがないだろう。彼は他の魔術師とは規格規格が違うのさ」

魔術的強化加工されたガラスを挟んで愛しの弟、又は助手を見る二人。お察しの通りオルガマリーとダ・ヴィンチである。

「そんな事は貴女に言われなくても分かっています。それより礼装の説明をしなさい。顔の穴を増やされたいの？」

「何やら私へのヘイトが異様に高いみたいだけど……まあそのオーダーに応えよう」

流れる様に眼鏡を装着するダ・ヴィンチに怒りメーターにカウンタが入る。ノエルがいる手前グツと、それはもうグツと我慢し説明に耳を傾ける事にした。たぶん後でダ・ヴィンチは鋭いフックをボディー耐久Cーに喰らうことだろう。

前回、ダ・ヴィンチの礼装は内側から暴発するように破壊されていた。更に刻印サーキットされていた回路は物の見事に焼き切れていた。原因は礼装の許容魔力量を超えた事にある訳だが、天才たるダ・ヴィンチちゃんは相応の対策はしてあったのだと言う。

「安全装置は付けていて当たり前だからね。不具合があれば強制シャットアウトしてポ

カンとなる前に止まる筈だったんだ」

「つまりシステムは最後まで異常とは捉えなかった。じゃあ魔力を送り込んだ直後ではなく起動直後で暴発した事になるわけね。安全装置とやらの故障じゃ無ければ」

「流石ロードだ。理解が早くて助かるなあ」

「世事はいいわ。それでどの様にして改良を加えたのかしら？」

無駄話はいいいそれよりノエルの事だと言わんばかりに脱線をしようとする度にバツサバツサ切り捨てていく。途中挟んでいく語らいに楽しさを感じるダ・ヴィンチからしたらぶーたれる所だけれど、姉弟してるなあとほっこりするので余り気にならなかった。

礼装を改良するにあたりノエルの事をよく知らなければならなかった。それは性格であつたり、身体であつたり、魔力であつたりするのだが詳しくは割愛する。

兎も角、ノエルの場合魔力について詳しく知る必要があつた訳だ。元より少ない魔力で多くの結果を生む性質がキツカケでカルデアの動力源となつたノエル。であるならばそれは如何程通常とは違うのか。

「通常100でシールドを張る所、ノエルの場合1で張れるわけだよね。つまり同じ量の魔力を送るとシールドが100枚張れちゃう。シールド100枚張れない礼装に100枚張れるだけの魔力突っ込んだらそりゃ壊れるよね」

「要は許容出来る魔力と発動できるシールドの数を合わせたわけね、回りくどい…」
超簡単に言えばノエルに規格を合わせて作っただけです。

「まあ今回は数より質で勝負してみたよ。タメ技つてロマンだよね。出力も調整出来るように組み込んだし、暴発はしないよ……たぶんきつとMay be」

「一度座に帰つて再召喚しましょうか」

「召喚する際に使う魔力は果たして誰のなんだろうね？」

「ぐぬぬ…」

そんな仲良いのか悪いのかよく分からない保護者達のやり取りなど差し置いて、ノエルは礼装をじつと眺めていた。前回でいきなり壊れてしまったのだから無理もない。

『じゃあ合成獣^{キメラ}を出すから使い心地を確認してくれたまえ』

『危ない様だったら直ぐにでも終了するから安心して。怪我だけは気を付けるのよ!』

『姉と言うより母親だなあ』

また暫く向こう側で一悶着しているようだが、直ぐに場面が草原地帯に切り替わり自分より一回り以上大きい魔獣が現れた。クリバフを積まれると痛い。

「起動承認」
スタートアップ

戦闘態勢入ったのは同時、キメラは咆哮し闘志を漲らせた。ノエルは指先に魔力を注ぎ始めた。

「注げ―貫け 注げ―穿て 注げ―射殺せ 満ちた―満ちた」

キメラは咆哮し闘志を漲らせた。ノエルは張り詰めた魔力を解き放った。

何にも染まっていない無属性、火や風でもなければ呪いも乗せられていないただ圧縮された魔力の弾丸。それが齎すのは破壊という結果。

であるならばキメラが貫かれ、爆発四散したのは当たり前だった。余裕そうにターンをクリバフに費やした結果は無残な死。あまりに呆気なく戦闘は終了した。

「終わった」

このあと障壁に傷一つ付けられず、様々なエネミーを一撃の下に粉碎していった。その中には劣化とはいえサーヴァントも含まれていたらしいがその事実を知るのは三人のみである。

ノエルは自身の恐ろしさを理解出来ず首を傾げ、ダ・ヴィンチは次の礼装の案を模索し、オルガマリーはそつと録画データを抜き取った。

マリスビリーが残した動力源の少年取り扱い説明書に戦闘をさせてはならないという旨が記されていたのをこの時になってそつと思いついたとオルガマリーは語った。なお事実かどうかは灰になった後なので確認出来ない。

「道具作成Aを全力発揮した結果がこれだ」

「護身を辞書で引いてきなさい天才」

「自分の命は救えるから間違ひなく護身用魔術礼装だ。ノエルは安全だねお姉様？」
無言のガンドがダ・ヴィンチを襲った。

「お腹、空いた」

☆☆☆

ノエルには個室が用意されていない。言うなれば水槽の部屋が彼に用意された唯一の部屋。なのでノエルの私物は基本的にこの部屋の端に纏められている。

ノエルの私物は全て貰い物だ。メンズやレディース関係なく重ねられた衣服、ロックミュージックのCD、綺麗な細工が施された宝飾品、ミステリー小説、コスメティック、折りたたみナイフ。これ全てが貰い物。

雑多に並んだ私物の数々が積み重なれば積み重なる程ノエルは重さが生まれると思った。そして貰いすぎたとも思うのだ。だから今日も彼は水槽へ還る。

ノエルの私物は全て貰い物だ。だからお返しの品をあげることは出来ない。それは大切な物だから。姉に頼めば喜んで協力してくれるだろうけれど、それもまたオルガマリーから貰ったもの。

「姉様に、返したい」

ならきつと自分は水槽へ還らなければならぬのだろう。自分が溶けていくような感覚に心をすり減らしてでも返すものがある。返さなければならぬものがある。返したいものがある。

初めて水槽へ入った時、父マリスビリー・アムスフィアは笑って自分に言ってくれた。

——ありがとう。

嬉しかった。父親からの愛情を感じた。勘違いでも別に構わなかった。確かに父は喜んでくれたのだから。

だから姉も喜んでくれる。毎日欠かさず水槽へ還ればいつかきつと全て返せる。ああでも——

——また、増えた

ガラスケースに入った魔術礼装を見てそう思った。

彼は笑えないが笑顔が好き

楽しい時、嬉しい時、人は笑みを浮かべる。

ノエルはそんな笑顔が好きだ。自分では笑顔を浮かべる事が出来ない。なので姉たちの笑顔を見る。

オルガマリーは何時も慈しむ笑みで自分を見てくれるが、一瞬見せる屈託のない笑みが何よりノエルの心を温めてくれる。

——好き

ロマニは人懐っこい笑みで自分を見てくれるが、時折見せる達観した様な笑みがノエルの心を焦らせる。

——早く

レフは柔和で人好きする笑みで自分を見てくれるが、ふとした瞬間に見せる冷たい笑みがノエルの心を締め付ける。

——何で？

ダ・ヴィンチはよく分からない笑みで自分を見てくれるが、しばしば見せる熱のこもった笑みがノエルの心を疑問で埋める。

——よく分からぬ

マシユは——

☆☆☆

ノエルは暇を持って余していた。

姉から義務付けられた休憩時間を消費するのにダ・ヴィンチやロマニに会いに行くのだが、今日はどうにも二人とも手が離せない事を抱えてしまつて会えない。

水槽へ還ることも出来ず、されど知り合いに会えも行けないこの状況下、ノエルは腕に抱えられたお菓子群を手に廊下にて彷徨い続けることしか出来ない。

「ん、マシユ?」

普段検診以外では殆どすれ違う事もチラリと顔を見ることもない友人が後ろ姿を晒していた。バイザーが無ければ光を吸収する深紅の瞳に光が入っていたかもしれない。

小さな両手に余るお菓子群を持ち直し小走りに駆け寄る。マシユは本の事や外の世界の事についてよく会話を交わすけれど、普段の生活については何も言ってくれなかった。聞いても面白味が無いからと話題から避けられた。

いい機会だとノエルは脚に力を込める。

「マシユ」

定期的に運動をしてこなかったノエル。運動不足のお父さんが子供の運動会の際に張り切りすぎた結果どうなるか分かるだろうか。答えは盛大に転ける。

つまりノエルは転ける。自分の足に引つかかかって、何も無いところで盛大に転けた。持っていたお菓子群も同じく礫となつて散らばってしまう。追い討ちのようにクリム系のスイーツが顔面に炸裂した。

髪から頬へと白い生クリームが滴るのがねっとりとした感触で分かる。顔全体から香る甘い匂いからやつとクリーム塗れになったことをしつかり認識した。

「甘い」

「ノ、ノエル!? ダメですよバッチイです!」

初めての友人が振り返つたら転んでいてクリーム塗れになっていたと言う状況。マシユは両手を右往左往させながら何とか解決しようとしてみた。散らばつたお菓子群をテキパキ片付けたら、拾い食いを止めないノエルを窘めたり、シャワーの準備をしたりとそれはもう頑張つた。

「や、やりきりました…」

そして達成感を感じた時、マシユはノエルを自室に連れ込んでいた。半ばパニックな脳でシャワーを浴びさせようと思つた際に身近な場所を選択してしまつた。

「友人を自室に入れた時には一体どうすれば、ミステリー以外のジャンルも読み込んでいれば良かった。全くもって次のアクションが思い付きません」

スプリングのきいたマットレスの上で自分の膝に顔を埋める事態になった。頭を抱え必死に選択肢を捻り出そうと試みるも無駄だった。唸っても、身を振っても、かぶりを振っても状況を打破出来るアイディア浮かぶ事はない。

「あ、服……どうしましょう。私の服しか無いのですが!？」

収納を確認してみても女物の衣服しか存在しない。彼の着ていた服は白いクリームに犯されており洗濯に出してしまったので手元に無い。

「寒い……」

「すみませんノエル今空調……を……」

ノエルにはバスタオルとフェイスタオル以外に用意されていなかった。そして水槽の中で裸である時間が長いノエルは羞恥心が決定的に欠けていた。

「どうしたの?」

「え、あ、いえ。すみません実は男性の服はおろかノエルに合うサイズの服が無くてです。すね」

「別に、大丈夫」

小さな身体はバスタオル一枚ですっぽり覆われた。しかしあの布一枚挟んで彼の裸

体があると考えた瞬間マシユは理由が分からない羞恥を感じ、熱で思考はショート寸前だ。

取り敢えず無いよりはマシだろうと自分のシャツを差し出して見たが、これがまた逆効果。臀部を半分程隠れるに留まり、指先さえ覗かない袖、ボタンとボタンの間はチラチラと白い肌が見える。

(これは道徳的にアウトです。いち早く解決を図らなければ！)

マシユの知識に現状に照合するものは無かったが、少年に異性である自分のシャツ一枚だけを肌着なしで着せるのはマズいという事実はわかった。

「服は洗濯乾燥され次第取りに行きます。それまで此処で待機です」

「わかった。ありがとう」

「いいんです友達ですから、友達ですから！」

「うん、友達」

マシユはコミュニケーションが余り得手とは言えない。他人と関わる様になったのは最近で、気軽に話せる相手など殆ど皆無。その弊害からか彼女は時々不安を感じる。

自分は彼にとって本当に友人なのだろうか？

自分は彼にとって何なのだろうか？

自分は彼にとって――

けれどノエルは言葉にして、態度にして言ってくるのだ『マシユ・キリエライトはノエルの友人』だと。胸の奥がポカポカと熱を持つ。

この熱はどんな感情であるのかマシユには分からない。彼女は胸の内にある熱に向き合ってみたが言葉にならない。

「マシユ、笑ってる」

「え？」

自分の頬へと手を伸ばしたが確かに笑っていた。手鏡に手を伸ばして顔を見た。

「本当ですね。私、笑っています…」

マシユは自分自身が驚く程晴れやかに笑っていた。

「私は、こうやって笑うんですね」

「マシユ、笑うと、嬉しい」

ノエルは口の端を指で突き上げて無理矢理笑顔を作ってみせる。彼の表情筋はオリハルコン並に硬い。結果少々不細工な笑顔になってしまった。

「どう？」

「私はノエルの笑顔が好きですよ」

胸にある炉に薪が焚べられた。

不器用な笑みを浮かべるノエルが、感想を求めてくるノエルが、心を寄せてくれるノ

エルが胸にある篝火に薪を放つてくれる。

(これが、友愛なんでしょうか……)

彼女はこの感情がよく分からない。けれど悪くないと笑みを浮かべるのは間違っていないと確信が持てた。

なおノエルはマシユのシャツ一枚のノーパンと言うオルガマリー姉様が見たら大魔術を問答無用で唱え始めるシチュエーションだと言う事を忘れてはいけない。誰が見ても事案です。

「取り敢えず見えそ——寒そうなのでブランケットをどうぞ。今飲み物を淹れますね、コーヒーでいいですか?」

「砂糖、七個、ミルク、欲しい」

「うえ? 幾ら何でも糖分過多です。身体に良くありません」

「煎餅、ある。塩味で、中和」

マシユは思った。自分の友人は思った以上に阿呆だと。そして放つて置いたら最後、生活習慣病になつて薬の数が増えて行く所まで見えた。

死ぬ、間違いなく死ぬ。目を離したらこの子死ぬ。マシユは確信し、そして決心した。「私の目の黒いうちは不摂生な食事は許しません」

友人の健康くらいは守ろうと。

「味方、ロマニだけ…」

「あの人仮にもドクターでしょう!？」

現在珍しくサボることなくせつせと働く医療トップにマシユの鋭いツツコミが突き刺さった。日頃の行いが悪いからしようがない。

「でも子供の舌は有害なものを見極める為に苦いもの等が大人より強く感じられると聞きます。なのでコーヒーは止めてミネラルウォーターにしましょう」

「砂糖水？」

「ええ…」

甘ければ何でもいいのかとマシユは困惑の声を漏らす。砂糖水は幾ら何でもない。

この後、後日ノエル用の飲み物を常備しておく事を条件に砂糖を控えさせることに成功した。けれど自室にこれからも来ると遠回しに言われた事実にはマシユは乾燥仕立てほやほやポカポカの服を取りに行く道中に気付き、暫し扉の外で突っ伏すのだった。

☆☆☆

オルガマリーは身の丈を知る女だ。上に立つ者に向かず、マスター適正も無い上に人柄から他から受ける評価は低い。時計塔の天体科アナムスライアのロードの立場に居ながらロードに

相応しいのはキリシユタリアだと影で囁かれている事実も認識している。

魔術師として劣っているとは思わない。彼女とてその程度の矜恃を持っている。

だが彼女は自分の弱さを知っている。

オルガマリー・アニムスフィアと言う人物のカタログには乗らない弱さ。

それは心の弱さ。

前所長マリスビリー・アニムスフィアが病床に伏す前、次代のカルデア所長となる事が決まっていたオルガマリーが父の仕事の補佐をしていた時より自覚した。

明確に言えばカルデアの、自身の弟ノエルの真実を見聞きした時より強く実感した事
実だ。

オルガマリーは見た。

力無く固定された器具に吊るされた弟の姿を、その身体はまるで死に体の老木の様に弱々しく生気が伴っていない。良く撫でてやった頭は垂れたままで髪も振り乱した様に纏まりがない。

あれはなんだ。あんな存在は私の弟ではない。否定した。何度も何度も否定し続けた。オルガマリーの脳は拒否以外の選択を許さなかった。

足腰に力が入らない。嘔吐く様に意味を持たない声を漏らし、目が痛みを発するほど熱を持った。

オルガマリーは自分の状態が理解出来なかった。あれは自分の可愛がった弟ではないのに何故悲しんでいるのだと自問自答を繰り返す。私の弟は人間だ。人権を剥奪された家畜の様な扱いをされる筈がない。

違う。そう信じたかった。信じたかったのに――

「お前はアレを可愛がって居たからな無理もない。だが受け入れろ。アレは既にヒトとは呼べん」

横に平然と立つ所長であり、自身の父であり、目の前の弟の父であるマリスピリーはオルガマリーに平坦な声色で言葉を掛けた。

「これが最善。コレが居るだけで途轍も無いコストがカット出来る。維持費に金を使ってもプール出来る資金が残っているのはコレの功績と言えるな」

淡々と施設の説明を続ける父の姿に寒気を覚えた。尊敬していたはずの存在が自分とは違う化け物に見えて仕方が無かった。

「大凡の説明はこんなところだろう。質問は受け付けるよ」

「名前は……」

「ん？」

「名前は、あるのですか？」

震える声を必死に抑えて質問した。マリスピリーはその質問に目を丸くしていた。

「名前？ コレのか？」

オルガマリーは名前を聞いても頑なに答えなかつた弟に疑問を持つていたがここで合点がいった。

名乗る為の名前など、そもそも持ち合わせてはいなかつた。つまりそういうことだつたんだろう。

「私が、私がこの子に名前を付けてもいいですか？」

自然と口に出た言葉だつた。

勝手にするといひ。そんな言葉を置いてマリスピリーは部屋を去つた。オルガマリーは伏せた顔で父の顔を見ることは無かつた。

「そうね、貴方はノエル。よろしくねノエル、私の可愛い弟」

オルガマリーにはノエルが笑つた様に感じられた。例えそうでなくとも構わない。いつかきつと子供のような無邪気な笑顔を見られるだろうから。

心などどうの昔に砕けた。あるのは伽藍堂の隙間にある見せかけの硝子玉だ。彼女は心が弱い。少しの揺れでも崩れ落ちるだろう硝子玉ならなおのこと。

しかし彼女は折れない。自分の弟が笑える未来を保証出来るまで、オルガマリー・アニムスフィアは頼れる姉を張り続ける。

同情かもしれない。救われない運命を背負わされたノエルを助けたいと身勝手にも

思うのはエゴかもしれない。けれど――

――姉が弟を助けるのは当たり前なのだ。

――家族なんだから。

きつといつか一緒に笑おう。友達を作つて、勉強をして、遊んで、時に怒ったり泣いたりして、普通の人間の様に笑おう。

それまでオルガマリーは折れない、曲げない。

身の程を知り、何度弱さを知ろうとも前へ進み続ける。ノエルの為ならばこの身が、心が砕けようと前へ進み続ける。

オルガマリーはノエルの笑顔が見たいから。

☆★☆☆

水槽へと還る中途、いつも姉が居る。手を繋いで、互いの顔を合わせて、何があつたのか話す。ノエルのたどたどしい言葉でもオルガマリーは蕾が花開く様に笑う。ノエ

ルも姉の多忙さに目を見開く。

「姉様、疲れてる？」

「そうね、でも大丈夫。ノエルの顔を見たら頑張ろうって気になるの」

「頑張りすぎちゃ、ダメ」

「分かつてるわ身体を壊したら心配掛けちゃうから。でもありがとうね」

「屈むことで視線を合わせ心配させんと笑ってみせる。安寧と平常をノエルに齎せる。

「姉様、元氣出る？」

「首に手を回し頬を付けて背中を摩る。勇氣と活力をオルガマリーに齎せる。

「ええ、とても元氣が出たわ。本当にありがとう大好きよノエル」

「マシユ、言つた通り、姉様、元氣出た」

「ピシリと空氣が固まった。錆び付いたブリキの様に首をノエルに向けオルガマリー

は飽くまで冷静で優しく質問した。

「マシユって…マシユ・キリエライト？」

「そう、友達」

「声にならない悲鳴をあげた。強いて言うなら「ぴゃー」。

「友達!! 嘘う! 何もされて無いわよね? 大丈夫よね、ね!」

「ノエルは首を傾げて暫しブレイク中の姉を観察した。そして思った。友達を紹介す

るには時間が掛かりそうだと。

彼は今日も学ぶ

爛々と光る魔力の水晶、これは所謂電池である。蓄えた魔力を通电することでエネルギー使用する形になる。宝石魔術を雛形にした巨大な特殊人工水晶に魔力を注ぎ、空になりまた注ぐ事が繰り返される。数回も使い回せば劣化し自壊する。

天然の水晶であれば容量も耐久値も向上するが最終的に自壊する為人工水晶に落ち着いた。そもそも巨大な天然水晶をバカスカ買えない。

その電池に魔力を注ぐ存在こそがノエル。少ない魔力で多くの結果を生む稀有な性質を持ちながら膨大な量の魔力を保有する少年。そんな彼は少ない自由時間を除いた殆どを水槽で過ごしている。

けれど今日はどうも違うらしい。

「休暇？」

「ええ、休暇がノエルには必要だと判断しこれを可決したわ。私かね」

オルガマリーはそれなりの戦闘力を有する胸を張る。その顔は大きな案件をこなしたサラリーマンの様に晴れやかだ。

コネクションを利用し入念に根回しをした上で勝ち取ったノエルの時間。部下と自

身の名を利用しロードとしての立場をも最大限活用してこそ成り立つゴリ押しだった。脇を突かれたならば喰い破られる様な不安定な体勢であったがどうかやり切った。

いつ喰われるか分からない泥沼で胃液を吐くこともあったが、愛しい弟を思えば気丈であった。長く苦しい闘いであったが、日々の弟との触れ合いで闘い切った。

「でも、仕事……」

「ノエル……」

思わず下唇を噛んだ。ノエルは今も尚死した筈のマリスビリーの呪縛から逃れられないでいる。その事実が悔しくて堪らない。弟を水槽に縛りつける鎖など早く引きちぎってやりたい。

なのに何故ノエルは自ら己を縛るのか。

何故縋る様に水槽へと帰って行くのか。

まるで殉教者だ。

許しを乞う罪人だ。

「休むこともまた仕事よ。気にする事は無いの」

「だけ……」

「お願いノエル。今は姉弟で居させて？」

「……分かった」

すっかり間を取った応答にオルガマリーの心が磨り減ったがどうか耐えた。いや心など砕けた所でスピアの硝子玉を交換すればいいだけだ。彼女の心は伽藍堂であり、幾らでも換えを用意出来る。

「さあノエル、何がしたい？」

「ん、じゃあ、ハンバーガー、食べたい」

「……今日だけですからね」

ピクつく口の端を必死に抑える姉とは対照的に弟は顔に出ない分身体で喜びを表している。最近になってノエルの偏食防止策が施行され始めジャンクフードを味わえない日が続いていたからだ。

与えた場合には罰則がある為、ノエルにジャンクフードを布教した職員もロマニも手が出せない。密告したら金一封なんていう禁じ手に出たオルガマリーの必死さが伺える。

自分の健康を気にしての行動だと察している分駄々を捏ねる事も出来ず、然れど諦める事も出来なかった。もどかしい思いをしたが雌伏の時と耐えた。流石にお菓子を制限された時はシヨックで水槽に引き籠ったなんて言うことも有ったり無かったり。

そんな耐え忍ぶ日々も終焉を迎えた。最早ノエルは隠れることなくあの大雑把な味で有りながら癖になる至高の食物を口に出来る。

「姉様、行く」

「複雑な気分だわ」

まさか制限したジャンクフードに此処までの無邪気さを発揮するとは思わなかった。ノエルの健康を気遣ってこそその対応だった事もありオルガマリーの胸中はほろ苦い。

「姉様、血……」

「え？」

どうやら唇から血が出ているようだ。滲んだ血が口に入ってきて思わず顔を顰めた。

「痛そう、今治す」

バイザーをずらし、覗き、仄かな光と共に治癒した。唇に触れても刺すような痛みは無く、出血も無かった。巻き戻ったかのように以前と変わらぬ瑞々しい唇がそこにあるだけ。

「治った」

「ええ……ありがとう」

子供らしい小さく柔らかい手に引かれ食堂へと脚を伸ばす。しかしオルガマリーの胸中はジャンクフードを頬張る弟よりもっと重大な事実に掻き乱されていた。

（あの子に教えた魔術に治癒はない。魔術礼装も自己回復は出来ても付与は出来ない完全な自衛設計。アレは一体何？）

オルガマリイは姉として、魔術師としてノエルのことをまだまだ知らない。

マヨネーズベースのソースを口にベツタリ付着させながらピクルスの酸味と薄っぺらいながら肉の味を全面に押し出してくるパティの不健康な味の調和に舌鼓をうちながら今後の事を考えた。

ロマニの所には行けない。何故なら彼の居場所は大概あのサボリ部屋だからである。口約束とはいえ部屋について秘密、であるなら姉同伴では近寄る事さえ叶わない。

あと察しの通りオルガマリイは休みを取った。弟の休みに合わせて休暇を取った。所長にまず休暇が存在するのかとノエルは訝しんだ。だが気にしてはならない。皺寄せはレフに行くときだけ言っておこう。

「もう口の周りがソース塗れよ。ほら拭ってあげる」

「ん、姉様、ありがとう」

では実質残るのはダ・ヴィンチの工房だろうか。あの玩具箱の様に多彩な物品が並ぶ場所なら退屈もしない。甘くて美味しいココアまで付いてくる。

更に今なら自称美人眼鏡講師ダ・ヴィンチちゃんがあんな事やそんな事まで手取り足取りマンツーマン二人三脚ねっちよりと教える事だろう。しかし教えた内容が役立つかどうかはイマイチ分からない。

「美味しかった」

「それは良かったわ……ええ本当に良かった……グスン」

個数制限を掛けなかった事でまさかハンバーガーの山が出来るとは思わなかった。後にオルガマリーはレフにそう愚痴ったそうだ。

☆☆☆

やあやあダ・ヴィンチちゃんだよ。

今日はどうやら助手君の保護者が来るらしい。正直言えば彼女とは反りが合わない、と言うか居ると色々面倒な事がある。疚しいことがあるからしようがない。

開き直るわけじゃないけど、ノエルは未知の塊だからしようがないと思う。あれは現代に残る神秘だろう。存在すれど実態が分からない。実に興味深いよ私の助手君は。

「おっと、忘れる所だった。ココアを用意しないと」

甘味を好む彼の事だ。何時も出るココアが出ないとすれば目に見えずとも落ち込む。あのバリカタな顔面の向こうは存外子供らしいのかもしれない。

「ダ・ヴィンチ、ココア」

「ダ・ヴィンチちゃんはココアじゃありません。ともあれダ・ヴィンチの工房へようこそ。必要な品を持って行くといい、勿論対価は頂戴するけどね！」

まあノエルからはリソースを工面して貰ってるから実質大安売りだけれども。

「気になってたんだけど、これらのリソースってどうなってるの？ 依頼品じゃ無いわよね…」

「ノエルからちよちよいつと拝借してるけど？」

理解している事だったけど所長って重症だよ。見てみるよあの悪鬼羅刹、あれが実態のない威嚇だなんて到底信じられないよ。所長がサーヴァントだったらキャスターよりバーサーカーの方が適正が高いんじゃないかな。

「まあまあ落ち着きなさいお義姉様」

「貴女のお義姉様になった覚えなんて無いわ!？」

ついこの間まで顔面蒼白で胃薬片手に執務してた人間には見えない。彼女個人はそこまで興味は惹かれないけれど、姉弟としては中々に面白い。目の前に居る小心者でチキンハートで拗れた性格の持ち主がノエルと言う一人の存在を横に据えるだけで化けるのだから。

互いに全幅の信頼を起きながら相手に凭れる事を忌避し、逆に凭れかかって欲しいと欲する。それが彼等の依存の形。どちらも受け容れる体勢で気を張り続けていると言う一見して微笑ましい光景だ。

けれどノエル達の場合は目に見えない、もつと歪な――

「ダ・ヴィンチ、これはノエルの私的利用ですよ？ 聞いていますか、これは立派な規則違反——聞けて言ってるんでしょが！」

「あばば、ちよつ、所長。崩れる！ 私の黄金比がアイアンクローで潰れる——!?!」

握力を強化してまで私の頭蓋を砕きたいのかこのブラコン。ノエルもココア飲みながら観戦するくらいなら助けて欲しいな。後で鏡でチエックしなきゃならない。いや何時も見てるけどね。結局自分の出来栄えに惚れ惚れして暫く眺め続けるまでがワンセットだ。

「大丈夫だって、ノエルに強要した訳でも無いし体液を採取したりもない。所長が危険と判断する事柄は何一つ犯しちゃないよ。天才に二言は無い」

さつきまで私的利用やら規則やら言ってる彼女だけど、結局はノエルに被害が無ければ罰則なんて与えない。偏食防止策も身体への配慮からだし。

どうにもポンコツと言うか、アホというか、若干残念な所はノエルが関わりと悪化するみたいだ。視野狭窄なんて目じやないよノエルしか見えてない時あるよこの人。

まあ気持ちは非常に分かる。

「今日、何教える？」

「おっと、お義姉様とお話したら忘れてたぜ」

「お義姉様って言うな！ あと毎回その眼鏡は何処から出てくるのよ!?!」

ツツコミ役が仕事をすると何時も脱線してしまうな。いや脱線するのもさせられる私だけだ。だって面白いんだもん。

「では今回はこの指輪型の礼装について解説といこう。後で改善点を聞くから考えながら聞くするといいい」

「分かった」

—やっぱり美少年は最高だぜ—

☆★☆☆

空気はまさに混沌を極めていた。

マシユ・キリエライトはオルガマリー・アニムスファイアにとって頭痛の種の一つだ。所謂上司と部下の関係に相違ないのだが、マシユの存在はオルガマリーにとって些か複雑なのだ。

父が行なっていた実験の一つ、その主産物。離反の可能性も高い—と勝手に思い込んでいる—存在、それもAチームに所属が決定しているのだから余計に悩ましい。

そんな目に見えてソワソワとしている友人の姉であり上司をマシユはどう思うだろ

うか。

(睨まれてますね。仏頂面に眉間に皺を寄せて……あ、今の一瞬ノエルに似てました!)
身に覚えなど勿論ないので困惑していた。

だが此処で沈黙に耐えかねたオルガマリーが膝を叩き言葉を発した。

「貴女はノエルの何なの!?!」

いや違うそうじゃない。

「ひゃ、はい!」

いきなりの大声に背筋が思わず伸びた。

「友人をやらせて頂いています! マシユ・キリエライトです!」

真面目に答えてはならない。ポンコツに成り果てたオルガマリーは返答など考慮に入れていない。そうなれば最期――

「そんな破廉恥な仲はお姉ちゃん許しません!!」

「何を仰っているのか分かりません!?!」

――著しく残念度が上がる。

顔を真っ赤に染めて目の焦点も合っていない。言動も会話の前後に関係性を認めず、更に残念が加速する。

あと補足するとオルガマリーが破廉恥と称したのはノエルに膝枕をしているマシユ

を指している。頭を撫でる技量を日々更新しているマシユの攻撃にノエルは既におねんね中だ。

「何様なの貴女、一体その膝に誰を乗せていると思ってるのかしら？ 私の弟よ、私の!!」

「ええ…」

「毎日部屋に連れ込んで、膝枕なんて私もやってない事を見せ付けるように…：羨ましい」

絞り出すように本音を零す辺り相当に膝枕にご立腹だと分かる。分かるがそれを恥ずかしげもなく言えるところを見ると手遅れかもしれない。ダ・ヴィンチは間違つてはいなかった。

「えつと、では代わりましようか？」

その言葉はまさに悪魔の囁き、オルガマリーは何かと世話を焼いては鬱陶しがられるお母さんくらいノエルに構つて構つて構い倒したいのだ。

だがオルガマリーは現在こんらんしている。わけもわからず自分を攻撃してしまつた。

「本人の合意無しでそんな事していい訳が無いでしょう!？」

「ええ…」

一体膝枕とは何だったのか。マシユは二回目の「ええ……」の中で思わざるを得なかった。

「助けてレフ、こういう時どうすれば弟のハートを掴めるの？ 私の理想は姉様と言つて私に抱き着いて離さないくらいの好感度なのに……」

オルガマリーは端末を弄りだし、仕事を押し付けた信頼出来る部下に通信を入れた。写しでた彼は目が座っていた。

『何かなオルガ、見ての通り君に頼まれた仕事に忙殺されているんだがね。急用なら余つ程なんだろう』

「そうよレフ。貴方の知恵を借りたいの」

『ふむ、まあ私で良かったら相談位は乗るとも』

所長の中の頼れる部下に堂々一位を飾る彼は何処までも頼もしかった。彼の立場上自分の仕事もあるのにも関わらず相談に乗る程度の余裕を持っていることに感服するばかりだ。

そしてオルガマリーは至って真面目に相談した。

「マシユから弟を取り返す為にはどうすればいいのかしら？」

通信は切れた。

「レフ、ちよつとなんで切るの？ ねえつてばあ!？」

何度もコールを掛けたが繋がらない。着信拒否の機能は無いので全て彼の意思で切っているのだろう。今頃彼は仕事を片手に拒否のアイコンを連打している事だろう。

「姉様、五月蠅い…」

☆☆☆

今日は姉の部屋で寝た。

けれど何時もは感じない布団の中にある体温の温もりはどうにもなれそうになかった。抱き枕の様に全体的に覆われているノエルは水槽に比べてやっぱり少し居心地が悪い。

普段全裸で寝ることを強要されている彼は姉が用意したパジャマが身体の動きを阻害している様に感じてならない。全裸ではダメなのかと姉に聞いたら顔を真っ赤にして却下されてしまった。

「今日はどうだった?」

「楽しかった」

偽りの無い感想。

オルガマリーは一言そうと返し、幸福感を咀嚼した。頑張った甲斐があったと抱き締

めながら思った。

「姉様」

「ん？」

——大好き。

オルガマリー・アニメスファイアはそっと目尻の水滴を拭った。

——私も大好きよ。

彼は手放さない

人は醜い。

古くより人は争い合い、奪い合い、屍の上に文明を発展させて行った。それは現代も変わらず、ただ手に持つ兵器が移り変わっていくだけ。

成長が無い。

理性と知性を備えていながら獣と変わらぬ生き方だ。平等を謳いつつ決して埋まらない貧富や差別意識も、決して叶うことの無い平和を平然と振り翳す人々も見飽きた。出来の悪い三流にも劣る映画などフィルムごと焼いてくれよう。

斯くも人は醜い。

血塗られた歴史は時間が経つても色褪せず、今尚濃く濡らしていく。最早救いようがない。恐らく人という存在は根底から間違っていた。人類の規格は欠陥だらけなのだろう。

ならば仕方が無い。

既に裁定は終えた。

人を救う為には人を滅ぼさねばならない。やり直さねばならない。矛盾を正し、管理

し、導き、人を救わねばならない。
安心しろ人類、我々が人を救おう。誠ほそう

☆☆☆

レフ・ライノールは現代に於ける人理焼却を助けるファクターだ。つまり人類の敵と言つても間違いでは無い。

しかしそんな彼も事を成すまでは一人の人間として過ごす必要があつた。故に己を殺し、仮面で隠しつつ生活をする。彼は優秀だ。雑作もないことだ。他愛無し。

彼の持つ知識は常に周りより上を行き、レフと言う存在は優秀だと知らしめて行つた。そんな彼がカルデアと言う組織で技術者としてのトップに着いたのは必然だったのだろう。

そこで初めて会つたのだ。ノエルと言う人間に。

最初マリスビリーからの説明では然程興味も持てなかつた。ただ魔術師とは言え実子をも使うのかと、度し難いなどそう思った位でノエルと言う存在には少しも興味を引かれることは無かつた。

レフがノエルに興味を持ったのはその暫く後、初対面時だ。なんと言つても第一声か

ら酷いものだった。

「変」

これが目の前の幼い少年から放たれた声だ。それはもうポーカーフェイスを突き破って呆然とした顔を晒した。

自身の仮面は社交性に優れている自信があつたが初っ端変人扱い。初めてのケースに冷静さを欠いていたのだろう。直球で聞いてしまった。

「何か可笑しい所があつたかな？」

聞いた後で一瞬後悔したが、吐いた唾は飲み込めないものだど切り替えるのは容易い。

「髪、もじゃもじゃ」

言つてる意味がよく分からなかつた。

「髪？」

「そう、髪のコ」

どんな言葉が返つて来るのかと警戒したレフであつたがその分身体から力が抜けてしまった。頭が痛む話ではあるが子供のデータが少ない故に対応が分からなかつた。つまりそういう事なのだろう。

然して二人は出会い、そして会話を交わしていった。レフがそこで感じた事柄はそう

多くはない。ただノエルは独特な感性を獲得した確固たる意志を持つ人間だと認識した。

意外だった。幼い頃から人とは掛け離れた環境に身を置きながら、あの固まった表情の向こう側は人間なのだ。

「現状に不満は無いのかね？ 正直私は平然と受け入れている君に疑問を感じているんだ」

「不満？」

不満など何一つ無い。それが返事だった。

（そんな訳が無い。この少年は家畜に近い扱いをされているんだぞ？ 不満を持って然るべきだ。まして実父が起因しているのだから…）

疑問の解消を優先し質問の内容を変えながら問を投げた。

（無欲では無い。ならば何故自由を望まない？ 分からない、不可解だ、違和感だ、奇妙だ）

「では最後に聞かせて欲しい。何故水槽へ入るのを許容するのか？」

ノエルは自分の意思で水槽へと帰っている節がある。例え強制であろうと義務であろうと自由であろうと水槽へ行くのだと言う。なら一体その真意とはなんなのか。

「父様、愛してくれる。水槽、還れば」

それは余りにも単純明快で残酷な返答だった。

子供だ。彼は見た目通りの子供だ。ただ父親に褒められたかった。頭を撫でて貰いながら笑って欲しかった。そして笑いたかった。ただそれだけの理由で身を削っている。

あんまりだと思った。これはエラーだとレフ自身も気付いていた。憎悪の対象であるはずの人間に向ける感情では無いはずなのだから。

「彼は君を愛さないよ」

これはお節介だ。期待していても何れこの事実気付いてしまうのだから、今のうちに知っておいた方がいい。その方がノエルの為だと思った。

「それでも、良い。家族、だから」

やはり人は愚かしい。レフは自分たちの定義を再確認した。如何に尊い存在であろうとその献身も無意味だ。受け取る側が居ない献身のなんと虚しい事だろうか。

憐れだ。

だからこそ愚昧で愚図な者がコレを穢す。ならばやはり仕方ない。我らの王は既にこの人と言う種族を、人類史を見限った。ならばレフという存在もまた壊さねばならない。然らばこれも救われる。

「そうかだが少年よ、いずれ気付く。その時に君が何を選択し、何を思い、何を感じるの

か身をもって知るといい」

そう言つてレフは退室した。何故だか無性にこの場を離れたかった。

そしてノエルは――

「柔和、尊大、どつちがレフ？ やっぱり、変……」

変わらずレフは変人だと思つた。

やはり彼は節穴だ。ノエルと言う存在をただの子供と評した時点で見る目が無いと言わざるを得ない。いや魔神が人の尺度を持ち合わせている筈も無いのかもしれない。



定期的な休暇を言い渡されたノエル。だがオルガマリーはその度に休暇を取れる訳もなく、と言うかレフが持たない。通常の倍以上の仕事量は精神的に辛い。

特に今日は絶対に休ませないと言い伏せられていたのは記憶に新しい。

「マシユ、フォウ、居ない」

「その様ですね。フォウさんは一体何処に……」

今では何時ものコンビ（所長非公認）となつた二人はカルデア内を悠々闊歩する事を許可されたマスコットのナニカ、不思議生物フォウの搜索にあたっていた。

しかしどうにも見つからない。何時もはふらつと現れては消え、ひよこつと出て来ては消えを繰り返して居る彼だが、今日はめつきり姿を見せない。

お世話係となったマシユをしてここまで姿を見せないのも珍しいとの事。

「いつもなら呼んでいれば来るのですが」

「用事？」

「かもしれませんが。パトロールが終わっていないのかも」

ふとノエルの視界に奇妙なものが入ってきた。廊下で倒れている人間がいたのだ。まさかカルデアの施設内で行き倒れに会うとは誰も思わない。

「マシユ、あそこ、人寝てる」

「え？ あ、本当ですね。廊下なんて寝心地の悪そう場所で何で寝てるんでしょう？」

「迷って、行き倒れ？」

「廊下で行き倒れるのも新しい」

近寄ってみれば澆刺そうな少女だった。橙色の髪をシュシュでサイドアップに纏め、一束ぴよんと跳ねた髪所謂アホ毛が特徴的だ。

そんな見知らぬ人物がそれはもう死んだように寝ていた。

「フオウ！」

次いでとばかりにフオウも傍らに居た。

「成程フォウさんはこの方の傍に着いていたんですね」

「起こす?」

「そうしましょうか」

ノエルは高速で頬をペチった。これは必ず起きる。実験には姉を使った。三秒で飛び起きていた。

3・2・1――

「ハッ?! ここは何処、私は誰?」

「此処はカルデアです。先輩とは初対面ですはい」

「先輩?」

「はい、何となくそうお呼びしたいと思いました」

「そっかあ先輩かあ…取り乱してごめんね。私は藤丸立香って言うんだ。気の利いた自己紹介じゃないけどよろしく!」

その後は謎のコミュカに圧倒されあれよあれよと自己紹介からカルデアの説明、ブリーフィングについてを聞き出されてしまった。当初の廊下で寝てた不審者から気さくな知り合いにまで一気にジョブチェンジだ。

立香のここまで来た経緯を簡単にまとめればこうだ。献血をして、胡散臭い人に丸め込まれて、気付いたらカルデアに居た。

「立香、知らない人、着いていく、ダメ」

「いやうんそうだよね普通。こんなちっちゃい子言われちゃ私も末期かも」

「初めて会って間もないですが、私も先輩の将来が心配です」

「フオ、フオフオウ」

フオウもマシユに同意している様だ。

皆一様に立香の人柄を理解した。つまるところ彼女はすっごい前向きでポジティブの塊。恐れ知らずとまでは行かなくとも肝は十分据わっている人物だと。

「まあ何とかなるよ、多分きつとメイビー」

「フオウ……」

フオウは呆れ返っている様子。大丈夫かなこの人と見えない字幕が出ているに違いない。

「フオウさんが私たち以外に懐くのも珍しいですね」

「この子？　と言うかこの子何？　猫なのか犬なのか狐なのか……」

「どれも、違う。フオウは、フオウ」

「分かんないけどよく分かった」

フオウは誇らしげに胸を張っている。曰く、オンリーワンにしてナンバーワンだそう。だがモフモフ一強の時代が間も無く終わりを迎える事をフオウはまだ知らない。

その後レフが現れたりしたが割愛する。

☆☆☆

そして立香は気が付いたら――

「特務機関カルデアへようこそ、私は所長のオルガマリー・アニムスファイア。此処では私こそがルールです。次遅刻したら相応の罰則を覚悟する様に。いいですね？」

「ふあい……」

――遅刻していた。

大勢の前で情けなくお叱りを受けた立香はハツキリとは聞こえずとも馬鹿にされているニュアンスが伝わってくる嫌なヒソヒソ声と視線に気まずいと言った様子で顔を伏せながら着席した。

そして不自然に上がった右手を下ろさずにいたオルガマリーは右手のその先を指す人物に顔を向けた。まあ勿論と言うべきかノエルだが。

「貴方はこつち」

そう言つて手を更に突き出していった。キリツとしていた顔は綻んで見る影も無い。その所長の姿に苦笑する者、呆れ返っている者、羨ましそうにしている者、最早頭を抱

えている者三者三様。

「来ちやつた、ダメ？」

「良いのよ、貴方にも関係のある物だから」

改めてキリツと顔を決めつつ、弟と手を繋ぎつつブリーフィングに入った。正直な話、既に所長としての威厳は無い。なおオルガマリーはそれに気付いていない。何故ならブラコンだから…

その当の弟はと言うと、知り合いに向けて手を振っていた。

マシュ・キリエライトはさり気なくスマイル込みで振り返した。

カドツク・ゼムルプスはため息を吐きながら振り返した。

オフェリア・ファムルソーネは気恥ずかしげにしながらぎこちなく振り返した。

芥ヒナコは返すことなく視線を一瞥されるだけだった。

スカンジナビア・ペロンチーノは投げキッスで返してきた。

キリシユタリア・ヴォーダムは微笑みで返した。

ベリル・ガットはニヤリと笑いながら親父臭く手を上げる形で返した。

デイビット・ゼム・ヴォイドはやけにソワソワとして居るようだ。

藤丸立香は――

——爆睡していた。

「出て行きなさい!!」

ブチ切れたオルガマリーの怒声が静寂に良く響いた。立香は深い眠りから叩き起される事となりやつちまつたポーズを決めた後刺さる視線から逃げるように出て行った。

☆☆☆

棺桶コフインなんて言う洒落にもならないネーミングセンスが光るカプセルはレイシフト呼ばれる時間跳躍を安定させ、マスターを守る役割を持つている。

と言うのが大分ざっくりとした説明だ。上記の内容など有って無いようなもので補完すべき事柄はたんまりある。説明する機会があればそれは必要な時だろう。

レイシフト適正を持ち、成績の上位者の集まりであるAチームがそれぞれのコフィンへと入って行く。

「姉様」

「どうかした?」

「レフ、何処?」

「ロマニは兎も角、レフが居ないのは変ね…」

近未来観測レンズ・シバはレイシフト先のマスターたちを存在証明する欠かしてはならない物だ。通信等のサポートもコレを利用する。レフはシバの開発に携わり一番理解している者。つまりこの場で持ち場から離れる事は有り得ない。

何かが可笑しい。オルガマリーはこの場からレフが居なくなる理由を探す以前に居ないこと自体に違和感を感じた。

(不具合があつたにしろ私に報告も無しに彼が持ち場を離れるなんて果たして有り得る？)

レフならこういう時に所長である自分に一言断りを入れる人物だとオルガマリーは考えている。緊張して忘れるなんて凡ミスもする人物じゃない。

不思議と弟の握る手に力が入る。

(ノエルが横に居るのに不安なんて表に出せない。少し部下が外してるだけじゃない、冷静になりなさいオルガマリー！)

「彼はミツシヨンが開始したらシバに付きつきりだから、きつと色々あるのよ」

「…そう」

オルガマリーが指示を飛ばすべく大きく息を吸い込んだ。そして――

——轟音と共に意識が遠くなった。

意識が遠くなつていく中、自身の足元から聞こえた爆発音が気掛かりだった。彼女の足元からという事は即ち、弟の足元でもあるのだから。

彼は進む、だが道は無く…

酷い夢を見ているようだった。

轟々と燃え盛る火炎に倒壊する瓦礫、呻き声もこの凄まじい光景に耳に入って来ないだろう。息を吸えば噎せるし目も乾く。臭いも酷く、正直直ぐにでもこの場を離れたい。

ノエルは腕に抱えたオルガマリーを見た。

——無傷だ。

障壁をシングルアクション一工程で張れる礼装が功を奏したと言える。ダ・ヴィンチ謹製の魔術礼装で無ければ間違いなく姉共々即死だった。

と言つても全くの無傷と言う訳では無い。無茶な高速展開に耐え切れなかったのだろう一部焼け焦げた礼装がノエルの肌を焼いた。自動回復リジエネレーションが働いているあたり完全に機能が死んでる訳でもないようだ。

けれど常より遅い回復力。痛む火傷に身体を震わせるノエルは堪らずバイザーを取り去り観た。魂と言う情報体から健全な状態をインストールし適用する。仄かな光を発生させた後、焼け爛れた肌は元の柔肌に戻っていた。

「姉様」

オルガマリーに目立った外傷は無かった。意識は落ちているが、呼吸も脈拍も顔色も異常は見受けられない。

だがノエルから観たオルガマリーはそうではなかった。決定的な物が姉には無かった。

「姉様、何処？」

この身体には魂が無い。

見回せど見つからない。身体が生きてるのにも関わらず中身が伴っていないのだ。これでは起きることも無いし昏睡の状態が続いてしまうだろう。最悪な場合死に至る。

それが意味する所は至って簡単、放っておけば腕に抱く姉が死ぬと言う結果。それはノエルにとって到底許容出来る結果では無い。

「助ける、絶対……」

姉を抱き寄せる。ずしりと重い彼女の身体はノエルにとっては全く違う意味に感じてしまう。魔力を強化に回しこの場を離れようと外へ駆ける。

だがその際に見てしまった。瓦礫に下半身を吞まれた友人の姿。満身創痕のマシユ・キリエライト。無二の友人がまさにそこで死にかけていた。

足が止まる。

「マシユ」

「ああ、ノエル。生きていたんですね、良かった。取り敢えずこの場を離れて下さい、危険ですから」

「でも、マシユ…」

マシユは微笑んだ。後で私も行くからとバレバレな嘘を吐いて遠ざけようとする。

「私より所長を優先して下さい。彼女は此処の責任者ですから。速く…」

優先すべき事は既に決まっていると言外に伝えて来る。それはノエルにとって卑怯だと思った。

「…すぐ、戻る。マシユの、バカ」

彼は無表情だった。けれどマシユの霞んだ視界には確かに悲しそうな顔をしたノエルが見えたのだ。

「嫌われて、しまったでしょうか…」

既に生きることが諦めた。瓦礫の下の脚は既に潰れて出られたとしても歩くことは困難だ。血も出ているからこのままではどのみち出血死する。けれど—

「仲直り、したいですね。しばらく口をきいて貰えないかもしれない」

彼女は死にたくはなかった。

「マシユ—」

臉を固く閉じようとしたその時、駆ける足音と共に自分の名を呼ぶ声が聞こえた。今日初めて会った人の声、先輩と慕いたくなつた橙色の少女。

「先輩？」

「マシユ、今助けるから！ 痛ア！」

瓦礫を持ち上げようと隙間に指を差し込めば火傷しそうになるほど熱かつた。しかし立香はマシユを思い諦める素振りを見せない。

だがその思いも虚しく、瓦礫はびくともしない。

「もういいんです。十分ですから」

「十分なもんか！ 今日会つたばかりだけど、マシユとはもう友達じゃない。なのに、なのに……そんな事言わないでよ」

「友達、ノエル以外の友達は初めてですね。私今とっても嬉しいです」

マシユはそつと立香へ手を伸ばした。

「手を、握つて貰えませんか？」

「……分かつた」

ありがとうと一言零した後で彼女たちの意識は燃え上がる赤のカルデアスへと引つ張られて行つた。



骨と骨が擦り合い、打ち付け合う音で目が覚める。

「何処よ、此処……」

焦土に倒壊した建物がチラホラ、漂うは生者を寄せ付けぬ死の気配。そこを徘徊するのは勿論生者にあらず、死した者の残骸が闊歩している。俗に言うスケルトン。

「まさか、特異点？ そんな馬鹿な!？」

オルガマリーは頭を抱えた。自身にはレイシフト適正が無いから。何より一人でこの場に居るから。

「ノエルは、ノエルは何処?」

弟の姿は勿論ない。そもそもここに来る直前の事も臆気でいまいち覚えていない。もしかしたら自分だけ此処に来てしまったのかもしれない。

「管制室、応答しなさい。こちらオルガマリー。管制室! 駄目ねカルデアとは一切連絡が取れない……」

八方塞がり吐息を漏らす。そして骨の音が一際大きく聞こえた。

「死霊使いネクロマンサーが喜ぶ光景ね。頭蓋を砕けば良いのかしら?」

振り向けばスケルトンが群れをなしていた。オルガマリーは慣れた様に心のガラス

を取り替える。

「動きは遅い。脚を強化して逃げた方が良いわね」

前方に居るスケルトンの脚をガンドで粉碎し空かさず逃走を選択した。後方を確認すれば脚を破壊され倒れたスケルトンに躓き、後のスケルトンが山になっている。

「そう言えばあの頭蓋って空っぽなのよね」

企みに成功したオルガマリーは皮肉を吐きつつ逃走に成功した。

「マスター候補の誰かが来てるならまず龍脈へ向かう。ならそこに賭けるしかないわね」

遠面の目標を定め、冷静を保ち、最善を尽くそうと悲鳴がするガラスハートを必死に切り替える。

しかしオルガマリーは出鼻をくじかれる事になる。肩に投擲ダー剣クが突き刺さっていた。これは先程まで翻弄していたスケルトンとは違うと明晰な頭脳から即座に叩き出す。

「精度が落ちたか、魔術師一人殺しきれんとは」

「アサシンのサーヴァント!?!」

黒い襪褌の外套で身体を覆い隠した髑髏仮面の大男。彼自身を表す固有名詞は無く、一種の称号として山の翁ハサン・サツバーハと言う。

彼は手に愛用の暗器である投擲剣を見せつけた後消えた。

「恐怖しろ」

「気配遮断のスキル、なんて厄介な」

「こつちだ」

真後ろから聞こえる低い声に反射的に回避行動をとった。丁度首があつた場所にアサシンが投擲剣を横に走らせていた。

「悪くない反応だ。だがいつまで持つか」

「暗殺者が良く喋るじゃないの」

もう既にいくつのガラスが砕かれたのか。死の恐怖は確かにオルガマリーの首を締め付ける。身体の震えを抑え、上擦った声を誤魔化し、脳内の警報を叩き壊す。

肩に刺さる投擲剣を引き抜き左に構えたオルガマリーは神経系を強化し待った。相手の高い敏捷と気配遮断による奇襲に踊らされると言う実感があつたからだ。

投擲をせずに直接攻撃をしてくる辺りこちらの実力を測り損ねている可能性がある。勝負を次で決めなければ確殺される。

「シャアアアアアア——！」

「そ————ッ！」

頭上から脳天狙いで襲い掛かるアサシンにオルガマリーは肩に刺さっていた投擲剣を型も何も無い力任せに一振で向かい打つ。

「浅いー！」

「それは腰が入ってなかったからよ！」

振り抜いた左の奥に見える右の固く閉じた握り拳、強化された腕力は確かにアサシンの胴体を通った。

肉を叩き、骨を砕く感覚が拳に伝わる。アサシンは弧を描きやがて地面に打ち付けられた。

「ゴフツ、魔術師が肉弾戦をするとは思わなんだ」

蹲り吐血するアサシンの残心を解かず魔術まで待機状態を敷いた。

「最近の魔術師は近接戦闘も視野に入れるものなのよ」

「ハハハ、それは勉強になる。次があれば気を付けよう……だが貴様も覚えておくとい。ハサン・サツバーハはタダでは死なん！」

よろりと立ち上がるアサシんに目を見開く。急所を穿ち消えゆくのを待つのみと考えていた。オルガマリイは倒しきれなかった事に顔を歪める。

襦袢の外套を脱ぎ捨てた。そして異形の手を覗かせる。人とは似つかないその赤い右腕にオルガマリイは瞠目し判断を鈍らせた。人を超える軽快な疾走は双方の距離を一気に縮める。

「星の輝きよ、彼の目を焼き滅せよ。」

——タイニースター・フォールダウン
「落ちろ小さき星」

恒星を模したバレーボール大の光弾が六つ、オルガマリーを起点としてアーチ状に展開されアサシンに殺到した。だがアサシンの右腕は光弾より速かった。異様に長く伸びる腕は目と鼻の先まで届くと言う距離にある。

「この身では宝具の開帳は叶わない、が頭蓋を砕く程度どうということはない」
眼前に広がる死神の手を睨み付ける。

（まだよ、まだ諦められない！）

諦めない。諦めたくない。オルガマリーは諦めることを許さない。諦めの先には何も無いことを知っている。藻掻けば何かを掴み取れるかもしれない。なら諦めてはならない。

声が響いた。

「その度胸、気に入つたぜ嬢ちゃん！」

その声はオルガマリーのすぐ側から聞こえた。そして眼前に青髪ローブの男が杖でアサシンの腕をかち上げる姿を認めた。

「ansuz」

「貴様、キャス——」

アサシンは言葉を言い切る前に業火に吞まれ、光弾で形も掻き消えた。

「フウ、これでアサシンも退場だな」

「貴方は…」

「そう警戒すんなよ。って言っても無理か…」

助けてくれた事には変わりない。だがそれがタダの親切心なのかと問えば絶対に違
うだろう。目の前の男はタイミングが良すぎた。何かを企んでいるのか、それともまた
違う思惑があるのか、どちらにしても信用しきるには材料が足りない。

痛む肩に手を添えて男と相對する。

「信用は出来ません」

「おお、えらくストレートだな。まあ納得出来るが」

「しかし私も情報が足りません。よって貴方の真名を含めた情報提供を求めます」

男は面白いものを見たとき犬歯を覗かせる。

「随分だな。オレには何の得があるのか明らかになってねえ」

「私が気に入ったのでしょう?」

男は今度こそ大きく口を開き笑った。

「ハッ、合格だ。オレの名はクー・フリーン。嬢ちゃん、名は?」

「オルガマリー・アナムスフィア。取引成立で良いわねキャスター」

「おうよ、取り敢えず契約といこうや。魔力に余裕は有るが十分じゃねえからな」

ピシリとオルガマリーは固まった。口を横一文字に引き結び、何処と無く目が死んだ

魚のようだ。この明らかな変化にクー・フリーンは首を傾げた。

「私、無いのよ……」

「ん？」

「マスター適正……」

「……はい？」

クー・フリーンの目から見たオルガマリーは魔力も魔術回路も一級の肝の据わった女だ。今回ばかりはオレにもマスター運が巡ってきたと期待もあった。

だが結果はマスター適正が無く、契約出来ないと来た。

「お互い運がねえな……」

「解呪不可の呪いよきつと……」

仄かな哀愁を漂わせながら肩を寄せ合い、目的地の龍脈へと向かうのだった。

☆★☆☆

外の喧騒を遮断した医務室にノエルは居た。姉をここまで必死に運んで来たノエルはロマニを捕まえて医務室に連れ込んだ。

ベッドに横たえられたオルガマリーは呼吸の度に胸を上下させている。横にあるバ

イタルも異常はなく、至って健全な状態だと示している。

「異常はない。だけど意識を取り戻さないのが不自然だな。気絶ってだけならもう目を覚ましてでも可笑しくは無いんだけど」

「やっぱり、中身、無いから」

「中身？」

「魂的な」

「霊魂的な？」

「そう、幽体離脱、的な」

「え、じゃあこの所長抜け殻なの!？」

「言い方、酷い。でも、そう」

ロマニは口をあんぐり開けて茫然自失と言った様相だ。そしてはっと気付いて頭を抱えてしまう。そろそろ相談料が高いがネットアイドルにどうしたらいいのか質問したい所まで到達しそうだ。

「なんでそんな面白おかしい現象に巻き込まれたんだマリー!？」

「取り敢えず、探そ？」

「うん…」

あたふたと慌てふためく頼りない大人が一回り小さい子供に落ち着かされてる図。

それでいいのかロマニ・アーキマン。大人としての尊厳は無いのか。

— 閑話休題 —

ロマニが端末に手を伸ばすのをやめた時、ある事に気が付いた。まず所長はカルデアに居るのかと。と言うか見えるのかと。

「たぶん、立香たちと、一緒。レイシフトした」

「だから隔壁をこじ開けようとしたのか……」

ノエルは医務室にオルガマリーを寝かせた後、ロマニを人波の中から引つ張り出し、マシユを助けに走り、隔壁が閉まっていく中レイシフトのアナウンスを聞き、慌てて隔壁がこじ開けようとしている所を保護された。

保護する際にダ・ヴィンチまで出張るところまで発展した。必死だったノエルはダ・ヴィンチだと分ならず裏拳を数発打ち込んだが、殴られた本人が何処と無く満足げだったので問題とはならなかった。

「まあ今職員が彼女たちを補足しようと躍起になっている。もし本当に所長がレイシフトしてしまったのなら時間の問題だよ」

まあ悉くが補欠組なのが不安でならないけどと不穏な言葉を残すロマニは姉の手を

離さないノエルを見て申し訳ない気持ちになった。

彼は手を掴む

アサシンを倒しカルデアの連絡を待ちつつ、マスター候補たちの搜索とエネミーの撃破を並行して熟すオルガマリーとクー・フリーンのコンビ。

出会うスケルトンを切つては投げ、ちぎつては投げと無双ゲームの如く蹴散らしている。二人の息は自然に合い誰もがマスターとサーヴァントの主従契約をしていると思うだろう。

だが現実是非情である。

「益々惜しいぜ。何でアンタはマスター適正が無いんだ？」

「弟の為に置いてきたのよ。て言うかそう思つてないとやりきれないわ！」

オルガマリー・アニムスフィアはマスター適正は無く、レイシフト適正さえ無い。だがしかし、弟のノエルには実はどちらも有る、それもそのどちらも良好。きつと母親の腹の中に置きつ放しに來たのだろう。

「弟ねえ」

「何よ？」

「いや別に大した事じゃねえけどよ。えらく溺愛してんだなと」

顔見りや直ぐに分かつちまう程にと冷やかす様に言つてのける男に思わず片眉を上げる。

「弟が可愛くない姉なんて居る？」

「ああ何だったかこう言うの……ブラコン？」

「サーヴァントが一体何処でそういう言葉を知るのよ!？」

この姉驚愕の声を上げながらも一言も否定しない。ダ・ヴィンチに言われ慣れてしまったか、ただ事実だと受け止めているのか。いやそもそもダ・ヴィンチに言われても最初から否定しなかった事実を鑑みるに後者なのだろう。

「ん？ 探知に誰か引つ掛かったな」

「こういう風に見るとルーンって便利ね。一時期廃れてた魔術には思えない」

「まあランサーのオレはそこまで多用しねえがな。このクラスじゃ俺の生命線だ」

そう言つて反応がある方向へと強化した視線を巡らせる。どうにもスケルトン多いがその中に紛れて大盾を振り回す少女の姿を確認した。

「ありやあ嬢ちゃんの言つてたマスター候補とそのサーヴァントか？」

「……その様ね。ここに來てデミ・サーヴァント化が成功するなんて」

見えた人物はマシユ・キリエライトと藤丸立香。どちらも記憶に残つた者達。付け加えるとそれぞれ違う意味で印象が悪い。立香の姿を見た瞬間に頭痛がするくらいには

悪い。

とは言えここに来てのマスターの存在は大きい。マシユはサーヴァント側だが立香はマスター。この際へつぽこでも居眠りと言う前科を持つていても横に居る協力者の楔になるならば贅沢は言えない。

「正直言えば外れ粹よ。片方一般人だし…」

「マスター適正はあるんだろ？」

「……生意気よね」

「まあアレだ。ドンマイ！」

英霊にフオローされる魔術師もそうは居ないだろう。まあ頑張れとしかかける言葉が見つからない。オルガマリーの背中はやや煤けてる。

「さて、どうするね？」

「どうするって、合流以外に何があるって言うの？」

ここに来て首に手を当ててクー・フリーンは言い淀み、少しばかりのやりづらさを感じる。目の前の魔術師は即合流以外に見えていない様子。

合流するとししないでどのような事が想定出来るのか、クー・フリーンはそこを考えて欲しいとオルガマリーに伝えた。

「まずあの嬢ちゃん達を見てどう感じる？」

「……ぎこちないわね」

「そうだな、良いところ新兵つてとこだらうよ。いや戦う術すら模索しながらだと最早民間人かもな」

やや颯めつ面を晒しながら思考するオルガマリーはハツとした。クー・フリーンが言わんすることに思い至った。詰まるところ良い的だと言いたいのだろうと。

「——囃ね」

「ああ、こゝいらにはオレのお株を奪った奴がいる」

杖を肩にポンポンと叩き、口を尖らせるクー・フリーンにオルガマリーは苦笑する。この男、槍恋しさに杖を代替品にする程にはキヤスタークラスに不満がある。そもそもルーン魔術つて面倒臭いなんて言う事態キヤスターらしからぬとは思わないだろうか。そんなキヤスターはマーリンだけで十分だ。冠位がつくキヤスターなのに劣化版聖剣を取り出して来るのはどうなのだろうか、クー・フリーン（キヤスター）は杖で我慢してるぞ。——もう原初のルーンで作れば？

よつてやや私怨が絡もうとも敵であるランサーとは決着を付けたいと肩をいからせながら語る。ランサーからしたら只のとばちりだが言わぬが花である。

「正直な所だが、此処で合流したらランサー奴が最後の最後まで出て来ない可能性がある」

「戦力差で勝ち目が薄くなるものね。如何に強力なサーヴァントであろうと二対一の真つ向勝負は避けたいはずだし」

敵サーヴァントはセイバーを除き性能が劣化していると道中で聞いた。アサシンの様子からして宝具の真名解放もままならない程に性能が落ち込んでいるとすれば尚更戦闘を避けてくるだろう。

宝具とは戦況を大きく作用する鬼札、有ると無いとでは雲泥の差と言えるのだ。

「てな訳で、此処は身を潜めて出て来たところを逃がさずに倒すつてのが良いと思うんだわ……」

「——分かったわ」

あつさりと了承した。それは気持ちの良いほどに迷いが無く、滞りが無い。これで驚かされたのは何回目だったかとクー・フリーンは唸る。

「アンタは魔術師らしく無い魔術師だと思つてたんだがな。正直此処で拒否されるのも考慮に入れてたしよ」

「私はただ成功確率の高い方に賭けただけ、囿作戦が失敗すると見えたなら反対していたわ」

「そうかい」

「だけど隠れ潜むのは貴方だけよ。私は行くから」

「あん？」

人差し指を立てながらオルガマリーは急遽立てた作戦とも言えない提案をする。それは本当にシンプルな物だった。

ランサーが現れたならばオルガマリーサイドで足止めをする、その一瞬で一気に燃やし尽くせとただそれだけ。結構無茶苦茶な作戦であった。

「無茶なオーダーに応えてこそそのオレたちだ。良いぜ受けてやるよ」

肝が据わっていて、強気で負けん気が強く、人間臭い一面も垣間見え、無茶苦茶な作戦行動を求めてくる。そういう女が横にいる時にこそクー・フリーンと言う英霊は真に身体の内にあるモノを熱く滾らせる。

「じゃあ行ってくるから、くれぐれも失敗しない様に！」

「ケルトの戦士に二言はねえ」

その言葉に満足気に頷くと全速力で足を走らせて行った。何だかんだで見知った人物が恋しいようだ。特にカルデアとの通信に気を急いでいる。

「剛毅に見えて根は小心者ってか？ 悪かねえなそう言うのもよ」

☆☆☆

魔術師に於いて重要なのは知識と経験と少しばかりの根性である。オルガマリーは常日頃そう考えている。やや強引で粗野だと認識しているが極論だとこれだけで十分なだから仕様がなない。

特に根性。これを欠けば最後、オルガマリーは何もかもを喪失し失墜するだろう。家を守れず、最愛の弟も守れず、自分自身さえ例外では無い。文字通り全てを失う。

若きオルガマリーにとり、隙あらば取つて食おうとする外敵が多かつた。名家にして時計塔のロードを冠するアニメスファイア家の強大さは彼女が継いだ後も顕在、変わったとすれば若輩にして未熟な当主のみ、であればそれに付け込む輩も少なくは無い。

時計塔も一枚岩ではない。派閥が有り、常に水面下での睨み合いを続けているのだ。余りに狡猾で憎たらしい狸達は日々の生活で化かし合っている。

そんな最中にオルガマリーは突如として放られた。カルデア次期所長として一定の知識や経験を積んだオルガマリーであつたがそれを水泡に帰す程濃密な不可視の戦争は彼女の胃をよくよく苦しめる結果となつた

だが彼女は強かに意志を通した。首を噛まれたら牙を砕き、鋭い爪を振り翳してくれば懐に潜り込んで顎をかち上げる。全ては安心と安全のため、オルガマリーは魔術師として根源に挑みながらも弟との生活も捨て切れなかつた。故にゲームで言うコンティニューを心に設けたのだ。

心が砕けても何度でも前へ踏み出せるように――

「だがらカルデアの礼装は貴女の様なズブの素人でも扱える様に魔力とワンフリーズで起動してくれるの!」

「いや、まず魔力って言うのがですね…」

「そこから講義しなきゃならないの!?!」

見事合流を果たしたオルガマリーが最初に始めた事は現状最後のマスターである藤丸立香を使える様にする事である。移動しながらでも魔術の『ま』程度は教えてみせると奮起したが早速一個目の心に罅が入った。

一般人である立香は一度シミュレーターで訓練した程度の急造のマスター候補、当然と言えば当然だが魔術の行使に難がある。強化、回復、回避と言った仕込まれた術式も満足に隆起活性化出来ない程だ。

「レフは居ないし、ロマニはカルデアの指揮を執ってるし、マシユはデミ・サーヴァントだし、藤丸以外のマスター候補は残らず爆発に巻き込まれて再起不能だし、当の藤丸は使えない。ここに来て幸運だったのはノエルの無事を確認出来たことくらいよ!」

『久し振りにヒステリックモードを見たなあ…』

『ロマニ、姉様煽る、ダメ』

「ウガアアアアアア——!!」

今までノエルにより抑えられていたゲージが度重なる現状の厳しさを伝える事で『流星^{ステラ}一条』した。コンティニューと言う名のガッツが無ければ砂の城が波にさらわれる様に崩れ去っていただろう。

「所長落ち着いて下さい。それよりこれからどうするかを決める事が先決だと考えます」

「……お陰様で凄く落ち着いたわ。カルデアに一時帰還する事も考えたけど、貴女たちの報告で悠長に構えている暇は無いと分かった。確かに見たのねマシユ・キリエライト」

剣呑な雰囲気を身に纏わせるオルガマリーは真つ直ぐマシユの目を見つめた。報告の中にカルデアに於いて最も忌避し、全人類ならず地球上の生きとし生けるものにとつて看過できない事柄が含まれていた。

それを報告したのはマシユと立香。曰く爆発が起きてからレイシフトする迄の短い情報の中に含まれている。

それは謂わば地球と言う星そのものであり、過去未来現在を映し出す惑星規模の地球儀。気象衛生が地球に浮く雲の動きや配置を観測する様にカルデアはこの鏡を使い人理、即ち人の歩んだ足跡を見通す。

もしその地球儀に異常が見られた時、地球にも異常が起こつていくという事になる。

「はい、私たちは見ました。赤く燃え上がるカルデアアスを」

暫し沈黙。それだけで置いてけぼりの立香にも、事の重大さを理解することが出来た。漠然とマズいと思つたわけじゃない、もつと本能的なものだ。命の危険に心臓が大きく跳ねるのが緊張と同居した静けさで嫌という程分かる。

誰かが生唾を飲み込んだ後にオルガマリーは話し出した。

「藤丸はよく分かつてないだろうから説明するわ。カルデアス、正しくは『地球環境モデル・カルデアス』は地球に魂があると言う理論に基づきその魂を投影したものよ。つまりカルデアスは地球そのものと言つていい」

「じゃあそのカルデアスが赤く燃え上がつていたとすれば……」

「ええ地球が燃え上がつていること。荒唐無稽だと断ずるには材料が足りない。でも楽観視は出来ない」

深呼吸により大きく呼気を漏らす。あくまで冷静に成功率や生存率の高い方に舵を取る。オルガマリーは両肩に重みを感じたが敢えてさも何も感じないと言つた体で自信満々に言つてのける。

「——故に動きます！」

凜とした物言いに聞いたカルデア職員たちは背筋を正した。管制室に残る職員は補

欠ばかりだがこの時ばかりは戸惑いや不安を胸の奥に仕舞い込み、ベテランの様に引き締めた表情を晒している。それぞれが今出来ることに全力を尽くすだろう。

「ブリーフィングの内容に大きく変わりはありません。私たちの居る特異点を」 特異点F」と呼称。特異点Fの異常の調査解明を第一優先。しかし積極的に問題の解決にあたることも念頭に置くこと。そして生きてカルデアに凱旋すること——以上」

オルガマリー・アニムスフィアは上位者では無い。ただ弟が一番大好きなだけの姉である。故に今しがた見せる自信溢れる姿は偽りだ、虚栄でしか無い。

けれど彼女の道はそうしなければならない過酷なものだ。乗り越えねば有るのは無いのみ。だから毎日両足に力を込め、根性でコンティニューを繰り返す。

そして彼女は今日この瞬間も虚勢を張り続ける。

誰も弱い自分に気付かない様に——

——気付いている者の目にも気付かず

☆☆☆

「どうやら本人の記憶は飛んでしまっている様だね。いやマリーの事だから敢えて記憶

に蓋をしてるのかもしれない」

通信の切れた管制室ではロマニが独り言の様に呟いた。眉を八の字に曲げ、手は先程まで映っていたモニターを無表情に見つめる少年の頭に乗せられている。

「人間の防衛本能って言うのはあくまで自分のことを守る為に働くんだ。彼女の場合は記憶に蓋をすることで精神に異常をきたすことを防いだって事」

友人の、そして大人しく撫でられている少年の姉がどういう状況なのか、容態について語る。少年ノエルにどの様な言葉を掛けるのが良いのかロマニには分からなかったから。感情を読み取りにくいと言う事も取り敢えず撫でていた。

オルガマリーを心配しているのか、今起こっていることが不安なのか、傍らにオルガマリーが居ないことにより寂しさを感じているのか、ロマニは一通り当てはまりそうな感情を挙げ連ねて行く。

だがどれも違うと次の瞬間理解した。

「良かった、姉様……生きてた——」

無表情な顔に一雫の水滴が流れ落ちた。

「……助けよう、絶対。大丈夫だよボクたちも手伝うからさー！」

精一杯の励ましの言葉は気付けば出ていた。ふんわりした笑顔も添えた心から生じた言葉。それに深い首肯が何度も繰り返された。雫の数は気付けば増えていた。

——ノエルは自分が嬉し涙を流せる事を知った。

彼は動き出す

「まずはしっかりと魔力を感じなさい」

魔術を知らない一般人相手に魔術を教えるにはどうしたら良いのか、それも休憩時間の合間にだ。教本も無く、メモを取るためのペンさえ手元には無い、正真正銘の無手。オルガマリーは居眠りと言う前科持ちの少女が口頭のみ説明で全てが飲み込めると露ほども思っていないのだ。

だがオルガマリーとして講師としての経験が僅かに有り、矜恃とは行かなくともムキになる程度の理由はある。せめて三流魔術師レベルのサポートを立香にして貰いたかった。

「まずはって…全く分かんないよ!?!」

「じゃあマシユとの繋がりを薄ら感じるでしょう?」

「ムムウ、確かに何か細かい線みたいのが繋がっている様な、無いような……」

「勘違いでもいいから感じなさい! それはマシユと繋がるレイライン、魔力を送り出すパイプ。レイラインを辿れば自ずと魔力の出処を意識出来るはずよ」

根気良く、怒らず、粘り強く、ゆっくり、だが着実に前へ進めば何れは藤丸立香と言

う一般人でも半人前に――

「よし、全く分らない！」

「マシユ！ 貴女から注ぎ込みなさい、こうなったらヤケよ！」

「落ち着いて下さい所長！」

この後ドライフルーツ休憩を挟みながら嘔み砕いた説明を繰り返す程に五度、藤丸立香は魔術回路が生命力を魔力に変換する事を認識した。

「やつとここまで漕ぎ着いたわ。次は魔術礼装の行使ね。基本となる魔術は後でゆっくり学ばせます」

「まだやるんですか!？」

「マシユを一人だけで戦わせたいの?」

「――やったらア！」

と言つてもカルデアのマスター礼装で出来ることは三つ、『応急手当』『瞬間強化』『緊急回避』である。発動もシンプルで魔力の使い方さえ知っていれば一般的な礼装より出が早い。立香の場合、一般人で魔力の扱いに長けているわけでもない為に開発者にとつて意図しないリキャストタイムが発生している。つまり発動のタイミングが立香のマスターとしての素養が試される事になる。

なお、Aチームは誰一人これを着用していない。自前が一番なんだろう。

「簡単なスペルだから嘯むことも無い。魔力の扱いに熟達していけば効率も上がっていく。今はひたすらに慣れること、いいですね藤丸！」

「了解！」

「やりましたね先輩！」

「これで一緒に戦えるよマシユ！」

互いの手を取り合い顔を喜色に染める主従にオルガマリーの表情はやや苦々しい。緊張感が無いことに呆れているわけでも、多少マシになった程度で安堵する彼女たちに憤慨しているわけでもない。

マシユには自分が、立香にはノエルがオルガマリーにはダブって見えている。見た目も性格も全く違うと言うのに言葉に出来ない一種の既視感を覚えてしまっている。

——私は何時もノエルに支えられっぱなしだわ

手の平を見て何度か握り込む。勿論そこにはノエルの柔らかい手はなく虚空を掴むだけだ。ここは既に戦場である感傷に浸る暇は無い、そう自分に言い聞かせるため強く拳を握った。

『サーヴァントの反応が近くにある?!』

「距離は?」

『南西に25メートル!』

「目と鼻の先じゃない！ 一体貴方は何を見ていたの!？」

舌打ちしそうになるのを耐えて報告のあった方位に視線を走らせた。見えたのはフードを被り、大鎌を持つ長身の女。クー・フリーンの話が本当であればランサー。先刻倒したアサシンと同じシャドウサーヴァント。

「マシユは藤丸を守るのに集中しなさい。藤丸はそこを動かないで、いいわね?。」

「え、でも所長。それでは…」

迎撃するには経験が乏しい立香たちが危うい。演習等ではデミ・サーヴァントとしての戦闘など考慮してはいない。立香など一度だけシミュレーションで訓練したくらいだ。

「今見える戦力では分の悪い賭けをする様なもの、マシユが心配するのも無理のない話だ。」

「逃げ隠れても無駄だと思いなさい。あれは劣化してもサーヴァント、逃げ切れる存在じゃない」

「迎撃しよう」

「先輩?。」

「こっちは三人居るんだし、全員が全力を尽くせば勝てる見込みはあるはず。所長が逃げを選択しないのはそう言う事だと思っ」

真つ直ぐな瞳をした立香はオルガマリーの目を捉えた。伺っているのだ、どうなのだと問うている。

何処までも前のめりな新人マスターにオルガマリーは最早何も言うことは無い。今はこの場にいるマスター候補が彼女で良かったと思えてくるただそれだけ。

だがその決意は無意味であるとオルガマリーは笑みを深める。端正な顔立ちをニヒルな笑みに変えた。彼女からしたら既に勝利している。勝負をする前に結果は見えていた。

「残念だけど答えは『NO』よ。防御に専念しておきなさい」

眉をひそめ困惑を隠せない。上司の真意を読み取れないと部下二人は首を傾げる。

「魔術師の戦いつていうのを見せてあげる」

向き直ると既にランサーは悠々と近くで直立していた。些か退屈そうに自らの得物である大鎌を弄んでいる。

「律儀に待つからね、無抵抗な者には手をあげられないつてどこかしら？」

気安く、気心知れた友人に話し掛けるように自然にオルガマリーは対面したランサーへ声を投げ掛けた。別に返答を期待したものでは無い。返答が来たらそれはそれでラッキー程度のもの。

「そんな大したものでは無いですよ。ただ優しく殺そうか、残虐に殺そうか考えていた

だけのこと」

英霊の中ではそれぞれ違う英雄としての矜持を持つ。王としての在り方であったり、騎士道精神であったりとまちまちだが、目の前にいるランサーは少なくともオルガマリーにはそれが無いように見えた。

ただ相手を殺す事だけに執着している。人の悲鳴を愛し、断末魔に心を躍らせる、目の前にいるランサーはそう言う気質を持つ者だと直感している。

反英霊、反転。オルガマリーの頭の中にはこの二つの情報がピックアップされる。本来の聖杯戦争であれば真つ当な英霊が召喚されるものだが、ここまで捻じ曲げられた環境では二つとも有り得る。

「へえ、じゃあ私はその立派な大鎌でナマス切りにされるって事？」

「二度切られたら最後、二度と元には戻りません。一生欠陥品で生きる事になります。いえ大丈夫ですよ怖がらないでも——直ぐに殺してあげますから」

饒舌に殺す殺すアピールをするランサーに辟易とするオルガマリーは重要な情報を確かに抜き取った。

『一度切られたら最後、二度と元には戻らない』

散りばめられたパズルのピースが組みあがっていく。

まず大鎌の正体は直ぐに気付いた。

「それ、不死殺しの大鎌ハルペーね」

「……ええ」

ランサーは動揺した。宝具を言い当てられた事には無い。冷静に思考し続けるオルガマリーに驚愕している。通常であれば恐怖の顔を貼り付け怯える所、彼女は脂汗一つ流してはいない。余裕さえ感じさせる。

「じゃあ貴女はペルセウス？ 違うわね、ハルペーに縁があつて今の貴女に相応しい人物は——」

——女怪メドゥーサ

その言葉を待たずしてランサー—メドゥーサーはオルガマリーに大鎌を振りかぶる。胡散臭さを醸し出す魔術師に危険信号が出せれたが故の行動だ。しかしそれもまたオルガマリーにとって計算された範囲に過ぎない。

事前に用意しておいた魔術を出力する。

繰り出される魔術は炎だとか風などと言う攻撃的なものではない。それらは三騎士に備わる強力な対魔力で打ち消される恐れがある。だから有害などと言えるほどの魔術では無い。

発動した魔術は光と音、遮光と防音の魔術。何方かと言えば初歩的で戦闘向きとは言えない魔術。しかしこの場に於いては最適と言えた。

「グツ——!!?」

感覚の鋭いメドゥーサの目を光で焼き、甲高い弾けるような音がメドゥーサの耳を強打した。一瞬の無防備、だがサーヴァントと言うのはこの程度では止まらない。目や耳が使えなくとも小娘一人程度容易く葬れる。

しかしオルガマリーが欲しかったのはその一瞬だ。周りへの注意を削ぎ、自身だけを狙わせ、敵愾心を煽る。全てはこの一瞬のためだったのだ。

「焼き殺せ——キャスター!!」

一瞬は火炎に吞まれ灰燼となった。

断末魔をあげたのはメドゥーサである。息をすれば肺が炭化し、手で火を払おうとすればより一層燃え上がる。ただの人程度に見舞われようものなら一瞬にして風に攫われる程細かい灰に変わるだろう。

桁違いの火力を放った者はオルガマリーが協力を扇ぎ受けた者、キャスターのクラスにて召喚されたクー・フリーン。

「ケルトの戦士に二言はねえ。言った通りだったろ?」

勝気に笑うクー・フリーンは確かに約束を守ったと杖を一回転させてから歩み寄って

来る。

「ええ私の髪があわや焦げ付きそうになった事以外は完璧ね」

「ハツハツハ、手厳しいなオイ」

『え、ちよつ……どう言う事?』

一部始終を見ていたロマニはいきなりの出来事に事態を呑み込めず、困惑の声を上げている。

「(こ)ういふ事よ」

悪戯に成功したとオルガマリーはクー・フリーンと拳を突き合わせた。そして悪びれも無く言った。

「言つたでしょ? 魔術師の戦いを見せるつて」

こうしてランサーは戦闘らしい戦闘もなくあっさり退場した。クー・フリーンにとっては自分の槍を取り上げられる原因であるが結局残るのはドルイドの杖であり、寧ろ虚しさだけが残った。

「アサシンの役目(ご)苦労様」

「ほつとけ!」

オルガマリーとクー・フリーン以外の人は皆一様に置いてけぼりにあっていた。



画面の向こうではサプライズに成功した時と同じ顔をしたオルガマリーが映っている。

医務室には普通に眠ったように寝顔を晒し、胸を上下させるオルガマリーがいる。

前者が魂、後者を肉体とするならこれは所謂幽体離脱なるものに属する現象である。まあ魂が過去に飛んでいたり、本人に全くの自覚が無かつたりするが幽体離脱だろう。

問題はどうかすれば元に戻せるかだ。魂を連れてこようにも現在特異点で絶賛活躍中。と言うよりレイシフトで帰ってこれるかも怪しい所、意味消失の危険性が無いとは言えない。と言うより何故レイシフト適正皆無の彼女があそこに存在出来るのかも疑問なのだ。

理想はレイシフトで帰還して肉体に魂を押し込む事だ。しかし特異点に居るオルガマリーは絶賛活躍中にして解決する気満々の様子。事情を説明してストレスで再起不能なんて事もありえない事じゃない。

「時空、ここ開ける?」

「いやいやそれをするなら魔法使いでも呼ばなきや」

「気合い」

「思ったより元気だな君！」

鼻血で医務室に運ばれていたダ・ヴィンチは鼻に詰めたティツシユを抜いて苦笑した。なおティツシユを使う前に血は止まつていたので血など付着していない。では何故付けたのかと言え、何となくと答えるだろう。

「座標、覚えた。問題無い」

無表情のVサインはダ・ヴィンチの鼻を刺激する。

「手伝いは必要かな助手君」

「礼装、幾つか貰う。いい？」

「構わないよ。なんたつて君の頼みだし、カルデアのトップを助けるんだろう？ 協力

は惜しまないさ」

ここは存外気に入っているとまたティツシユを鼻に入れた。次は徐々に血が侵食している。

「ありがとう」

ダ・ヴィンチはティツシユを一枚取った。

「君が人を頼る事は稀だ。次からはもつと甘えられる様にするといいよ。なんたつて子供の特権だからね」

ダ・ヴィンチはティツシユを適当な大きさに丸めた。

「私やロマニは勿論、他の職員も手助けをしてくれる。それを借りだなんて思わなくていい」

ダ・ヴィンチは鼻にティツシユを入れる。

「みんな君の味方だからね！」

「ダ・ヴィンチ、かつこわるい」

両方の鼻の穴に血染めのティツシユを入れた天才がいるらしい。おまけに美シヨタが好き。

——やはり美少年は最高らしい。

彼は入念な準備をする

青色に輝く奇跡の光は鉄を鍛える。金属音は一人っきりの部屋ではよく響き耳に残る。しかし不思議と金属音に不快感は覚ええない。今胸の内にある心は喜びだ。自分自身が思い浮かべる形に変わっていく鉄を眺めているのが楽しく音など気にもならない。

今まで万能と謳われた天才レオナルド・ダ・ヴィンチの元で幾度と教えを受けた。中には役に立たない内容もそれなり、いや割と多く含まれてはいたが、それでも余りある叡智より齎される知識はノエルの脳を強く刺激した。

子供とは好奇心の塊だ。何でも真似をしたがったり、分かりきったことにも疑問を感じ行動する無鉄砲さを持つている。ノエルもその例に漏れない。

ただ彼の場合自分の欲求を抑制することに慣れてしまっただけ。一度欲求が爆発すれば何処までも没頭するだろう。

結果、暇があればダ・ヴィンチの工房に足繁く通う事になった。気まぐれに語られる天才の知識を肴に甘いココアをちびちびと飲んだり、興味のある内容に琴線が弾かれたなら身を乗り出し記憶した。助手として実際に作業を補助することもあった。

魔術師としてはピーキーな存在だが、総合的に見れば汎用性が高い。それがダ・ヴィ

ンチより下されたノエルの評価だ。

さてノエルがダ・ヴィンチの工房に何を求めて来たのか。答えは至極簡単、彼は魔術礼装に興味を持った。

ノエルは自身の舌つ足らずな言葉に詠唱等に不具合があると自覚していた。故にその欠点を補う方法を模索した時期がある。そんな中彼の誕生日にダ・ヴィンチの作った魔術礼装が姉より送られたのだ。

説明を聞けば聞く程に希望が膨れる。水槽に還ること以外でも姉を助ける事が出来るかもしれない。胸が軽い、オルガマリーが笑顔で褒めてくれる事を想像するだけでも幸福感を感じる。

だが結果は失敗した。

魔術が発動する直前で礼装が弾け飛んだ。幸か不幸か軽い火傷で済んだがノエルの落胆の色は目に見えて濃かった。

それを見たオルガマリーは涙を流しながら謝ってくる、それを見たノエルはより沈む。そんな悪循環がああの時ああ場ではあった。

その後は知つての通りオルガマリーが悪鬼羅刹を背後に召喚してダ・ヴィンチ工房に殴り込みを掛けた。

改良されたダ・ヴィンチ謹製のノエル専用魔術礼装が届いたのは一週間後だった。仮

想エネミーをほぼ全て一撃のもとに粉碎し、過擦り傷程度であれば即座に回復。極めつけに劣化させたとはいえサーヴァントの攻撃を軽々受け止める障壁を張れる。

魔力の過剰消費で無理矢理事象を起こす必要も無く、言ってしまうえばスイツチを一つ押すだけで魔術を行使出来る。その事実を確認出来たノエルは福音だと感じた。

そしてそれからはダ・ヴィンチ監修の元ソレを作るようになった。基礎的な魔術を起動する礼装各種から、専門的でニツチな魔術を起動する礼装。衣服や武器、装飾品に雪解け水、コンタクトレンズに至るまであらゆる形態を持つ魔術礼装を製作。ダ・ヴィンチからは今度装甲車を作ってみようと提案されているがそれはまた別の話。

「形完成。後は、仕上げ」

それは錨アンカーに似ていたが用途は凡そ想像も出来ない。分かるのは恐らくノエルだけだろう。見てくれだけでは天才もお手上げ、顧問探偵ならあるいはパイプをふかしながら朗々と語ってみせるかもしれない。

息を錨アンカーに吹き付けると呼応する様に鈍く光る。その際に魔術式は刻まれ隆起し役割が与えられた。銘は『アニマくん初号機』。後にダ・ヴィンチがノエルに似合う名前を考えてあげるよと言った0.3秒後に飛び出た名前である。

ダ・ヴィンチ曰く「外見年齢に合った名称を勢いだけで口に出してしまった。浅慮な行いであった事は認めよう、だが良い銘だろう」と悪びれることも無く言ったらしい。

ノエルはテディベアが似合う可愛い男児だと、ダ・ヴィンチが職員に刷り込みを図っている事実をオルガマリーは知らない。

「試験不可、ぶつつけ本番、だけど——」

——大丈夫。

目を覆うバイザーを取り去りダ・ヴィンチの工房を出る。向かう場所はカルデアスのある中央管制室。鮮血の色を強めた瞳は未だに大切な者を捉えている。

☆★☆☆

冬木の聖杯戦争は7人のマスターとサーヴァントによるバトルロイヤル。最後の一組になるまで続けられ勝者には万能の願望器である聖杯にて願いを叶える権利が与えられる。聖杯には倒されたサーヴァント、即ち英霊の魂が注がれ十分に満たされた時に顕現する。

大家アインツベルンは聖杯戦争の度に聖杯を用意するが正しくは小聖杯と言い大元となる大聖杯の端末になっている。小聖杯の役目は主に倒されたサーヴァントの魂を

集める事。だが、今説明したい事に小聖杯は関係無い。

真に注目すべきは小聖杯の大元である大聖杯は未だに特異点Fに存在すると言う事実である。そして事態の元凶であろうセイバーがそこに居ると言う確固たる事実のみ。

「大空洞に行く前に聞かせてキャスター」

マッシュがケルト式訓練で宝具解放を目指し、寄せ集められたスケルトン相手に無双ゲームの如く一騎当千をしている姿から目を離さずオルガマリーはクー・フリーンに問い掛ける。

「今私は生きているの？」

その声は酷く怯えていている。口も一文字に引き結んでおり眉には皺が寄っている。それだけでそんな突拍子のない質問が冗談ではなく真剣そのものであると言う事が伝わる。

それにクー・フリーンは眉をピクリとも動かさずに答える。

「今オレと話してんのは誰だ？」

「え？」

想像しなかった返答に思わず顔を見た。

「今オレと話してんのはオルガマリー・アニメスファイアって言う魔術師だ。違うか？」

戦闘の際に垣間見せた獯猛な表情はなりを潜め、老成し理知的な雰囲気醸すクー・

フリーンがそこに居た。若い頃の彼であれば出せない落ち着いた姿だ。

「今ここに居るのが自分自身だったらそれで十分だろ。それにだ、此処でオレが死んでるって答えたとして立ち止まるか？」

立ち止まる。

果たしてこの言葉がオルガマリーにとつてどれ程重い言葉なのか。一番最初に頭に浮かぶのは取り残された弟で――

「――愚問だったわ」

立ち直りの速さが亜音速なオルガマリーの姿に微妙な気分になったがそこはケルトの勇士、即座に切り替えて訓練の最終工程に入る。

マシユは、『ロード仮想宝具　カカル疑似展開／デア人理の礎』を覚えた。

——ドライフルーツ休憩——
閑話休憩——

ドライフルーツも品切れになり、いざ敵本拠地へ乗り込まんとする直前にマシユは弱気とも取れる疑問を零す。

「残るサーヴァントはアーチャーとセイバー。果たして私たちが勝てるでしょうか？」

「アーチャーはオレに全面的に任せていい、腐れ縁なんぞな。セイバーに関しては正直

五分に持ち込めるかも分からねえ」

「それほどの手手なの？」

セイバーの真名はクー・フリーン調べから分かっている。

「聖剣エクスカリバーの担い手、騎士王アーサー。ヤツめ無尽蔵な魔力をいい事に平然と聖剣を振り回しやがる」

「ええつとつまりずつと必殺技を打ってくるつて事だよな？」

苦々しい様子で頷く協力者に立香は思わず頭を抱える。

「そんな相手にどう戦えば」

「不意打ちを狙うのはどうでしょう？」

「大空洞は思った以上に見渡しがいい。それに不意打ち程度で倒れてくれるならオレがとうの昔に仕留めてる」

「じゃあどうすればいいのさ!？」

議論に煮詰まっっていく中、オルガマリーは黙って先頭を進み続けている。勝利への確信が無いのにも関わらずあれ程堂々としていられるものかとマシユは突破口を考える立香を支えながら思った。

もしかしたら考えがあるかもしれない、モノは試しにと話を振ってみる。

「所長はなにか作戦でもあるのですか？」

「あるわよ」

あつけらかんと答えるオルガマリーに視線が集まる。通信の向こうでコーヒーを啜っていたロマニは噎せた。

「と言つても実際にセイバーを目にしてみない事には断言が出来ない。ただそうね、キャスターなら同じ様な事を考えていそうね」

話題にあがったクー・フリーンは顎を擦りながら続きを促す。

「要はマシユ、貴女よ」

「私、ですか?」

唐突に作戦の主軸に据えられたマシユは困惑した。無論任命された以上放棄する気はないし自分の出来ることを精一杯こなそうと言う気概はある。

しかしそれ以上に戦闘経験が乏しく、今さっき宝具を展開出来た様なヒョっ子デミ・サーヴァントが役に立つのかと不安に思うのも仕方ないことだ。

「セイバーの攻撃を宝具含めて全て防ぎ切りなさい」

「宝具含めて、ですか?」

「でない藤丸は死ぬわ」

「!?!」

「所長!」

マシユは顔を青くした。

立香は縁起でもない事言い出すオルガマリーに怒気を滲ませた。

「貴女は藤丸を慕っているようね。短い間にどんな変化があったのかは分からないけど。他人に興味を持つのは貴女にしては珍しいわ。だから親切に私が教えてあげる——」

——貴女が負ければ藤丸も負けるのよ

その言葉が決定打となりマシユの中にある、しかし目には見えないナニカがプツンと切れた。

「——分かりました」

俯いた顔を持ち上げ苦しそうに歪んでいた表情は別人の様に凜としている。迷いはない、恐怖を今だけはロツカーににでも仕舞い込んでしまおう。

「私が先輩を守り切れば、勝てるんですよね？ ノエルたちの元へ戻れるんですよね？」
彼女にとってカルデアは既に家なのだ。帰りたい場所であり守りたい自分の居場所。平穩を享受出来る唯一の場所。それが今失われようとしている。脅かされている。

同じ価値観を共有出来る親友を護りたい。

死の間際に手を握りしめてくれた先輩を護りたい。

生きていると言う充実感を教えてくれる日常を護りたい。

護りたい物が今自身の双肩に乗っているならば、最早恐怖を感じている暇はない。マシユの胸にあるのは何時でも他愛のない当たり前の日常なのだから。

「怖くないと言えば嘘になります。ですがそれ以上に取り零してしまう方が怖い」

「どうやら話纏まったみたいだな」

その言葉は最後まで紡がれなかった。突如として謎の飛来物が降り注いできたからだ。そして降ってきた物体を直ぐに認識することになる。それは剣であった。

咄嗟に杖と盾で弾いたおかげで無事であったがもう少し遅れていたなら誰かが深手を負っていただろう。

「防いだか、盾の英霊とは存外厄介なものだな」

「出やがったか信奉者。穴熊を決め込むのは止めたのか？」

「信奉者になった覚えは一つもないが、当の彼女に追い出されてしまつてね」

現れたのは黒いボディーマーに紅い装束をした男。彼こそが剣の雨を降らせた者の正体でありアーチャーなのだと言った。彼が認識した。

肩を竦めニヒルに笑うアーチャーと軽口を叩き合うクー・フリーン。旧友の様に言葉を交わす二人はこれから殺し合うようには見えない。

「じゃあまあ——死合うか」

「なに、直ぐに終わる」

杖を前に突き出しルーンを身体に刻む。指先の動きはブレる。視認が困難であり、また止めるのが勿体ないと思わせる程に美麗だ。

腕を前へと突き出し用意しておいた設計図を広げる。虚空より剣の郡が現れ、鋒は全て立香たちの方へ向き無機質な殺意をぶつけてくる。

初撃はアーチャーの剣の郡であつた。

蒼白の稲妻を置き去りに立香たちに殺到する同型の剣たちは当たれば痛いでは済まされないと彼女たちの本能に警鐘を鳴り響かせた。

だが盾の少女は既に誰よりも前へ出ていた。

「させません！」

剣は尽くが盾により撃ち落とされる。

「訓練が生きたな！」

描いたルーンに杖の先を突きつけ火炎を起こした。それも一つだけではなく幾つも用意されている。そして打ち出された火炎に追隨する様にクー・フリーンは駆けた。

だが此処でしてやられるだけのアーチャーではない。強化された脚力で地面を弾き、大きく横に飛んだ。手には既に黒い洋弓に矢に改造された剣がある。

「逃がすかア！」

一際大きな火炎を繰り出す。大きな火炎は放たれていた火炎を飲み込み豪火と化し方向を修正した。再び迫る炎を前にアーチャーは洗練された動作で弓に矢を番えた。

「フンツ——」

打ち出された矢は豪火に呑まれたが容易くは焼き尽くされはしない。矢に含まれた神秘が砕け、豪火を消し飛ばした。

打ち出された矢は神秘が含まれた立派な宝具だった。ランクだけならば低級もいところの劣悪品。しかし含まれた神秘は本物であり、宝具の形を破壊し解放すれば威力の程は跳ね上がる。

真つ当な英霊なら自身の切り札である宝具を破壊するなんて事はしない。だがアーチャーはその真つ当な英霊にはどうやら当てはまらない。彼は特殊な投影魔術により宝具をも作り出してしまふ。宝具に含まれた神秘をも再現してしまふ。

故にアーチャーは宝具の神秘を暴発させる。

ブローケンファンタズム
『壊れた幻想』を技として使用することが可能になっている。

「先に行きな。直ぐに追い付くからよ」

簡単に倒れてくれない腐れ縁に辟易としながらも楽しげに顔を歪めるクー・フリーンは立香たちにそう声を掛ける。

「いいえ、全員で叩き潰します」

だがその高まっていく熱に冷水を浴びせるような平坦な声が返ってくる。返事を辿るその先には――

「速攻で決めるわよ」

――オルガマリー・アニムスファイアが居た。